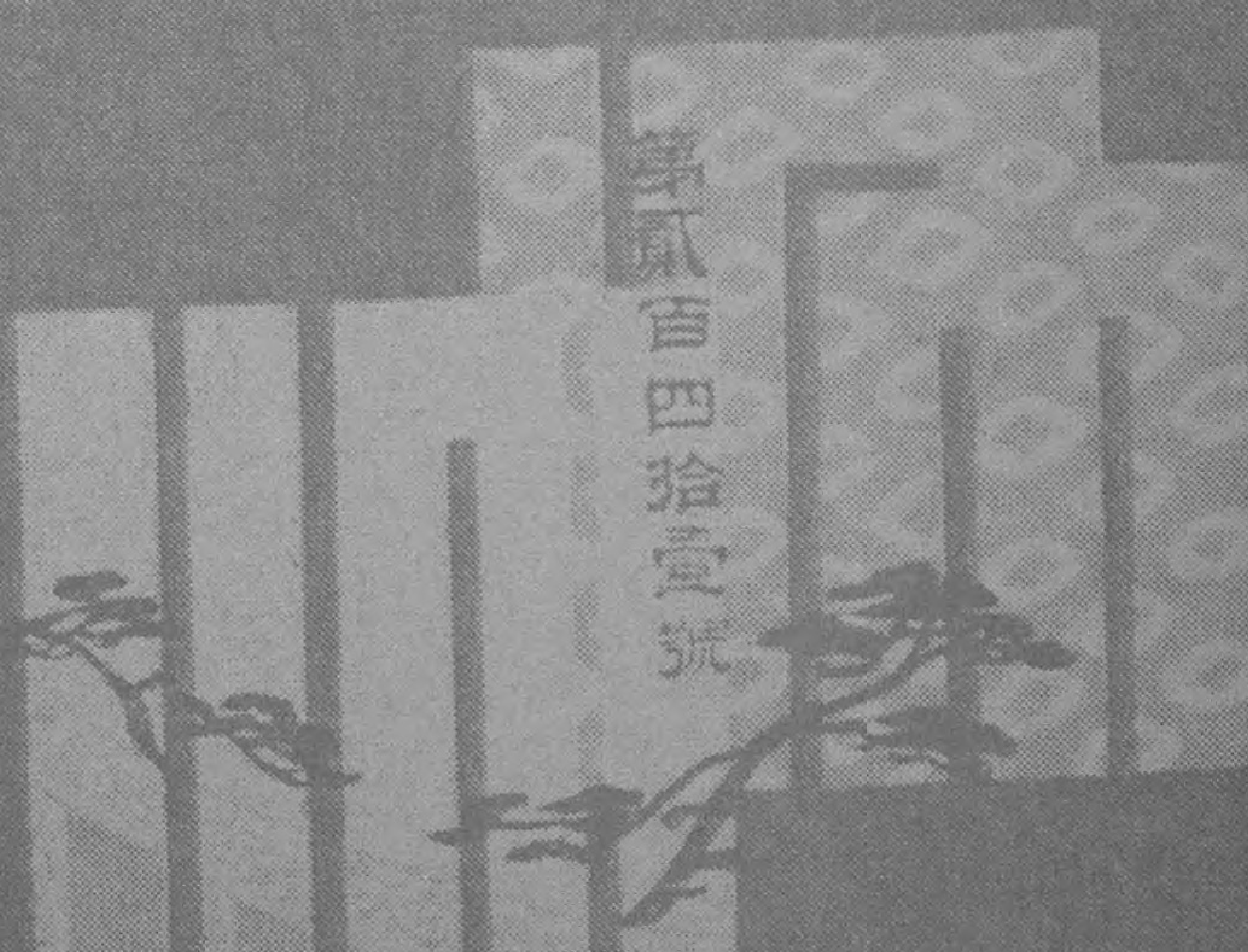
文藝



女鑑第貳百四拾壹號

目録

定價
一冊 金拾錢
六冊三ヶ月分 前金五拾七錢
十二冊半年分 前金壹圓拾錢
廿四册一年分 前金貳圓拾錢
全國無遞送料

明治三十四年十一月十九日印刷
明治三十四年十一月二十日發行

東京市京橋區築地二丁目二十一番地
編輯兼發行人 川崎直衛
東京市京橋區南八丁堀一丁目十二番地
印刷人 並木眞雄
東京市京橋區築地二丁目二十一番地
發行所 國光社
東京市京橋區南傳馬町一丁目七番地
發賣元 靜思館
（電話本局一千三百七番）

社告

從來各所より御寄贈にかゝる新刊新聞雜誌及圖書等單に**國光社**とのみ御認めの分は往々當部へ着せず爲に折角の厚意も遂に無にするに至り遺憾少からず候就ては甚だ御手數ながら以後必ず**國光社女鑑編輯部**へ宛て御寄贈被下度此段謹告候也

東京京橋區築地貳丁目廿一番地國光社内
女鑑編輯部

稟告

本誌(女鑑)編輯に關する即ち原稿投書等の事件は必らず**女鑑編輯部**へ御送被下度候又發賣に關する總ての事件は必らず**靜思館**へ宛御發信被下度願上候也

東京京橋區築地二ノ廿一、國光社内
女鑑編輯部
（電話新橋八十八番）

東京市京橋區南傳馬町一丁目七番地
靜思館
（電話本局千三百七番）

本誌定價改正

壹冊代金拾錢
六冊代前金（三ケ月分）五拾七錢
拾貳冊代前金（半ケ年分）壹圓拾錢
廿四冊代前金（一ケ年分）貳圓拾錢

全國無遞送料

本月より右の通相改め申候尤是迄前金御拂込濟の分は從來の定價に據り候也

明治卅四年九月

女鑑發賣元
靜思館

言し
志とやうれし
己はと海も
あゝまれし
こゝろを清まし
あまのとゝ
しるく



小川一眞製版印刷

故山階宮妃殿下御肖像


紅蘭

約束

紺屋の明後日、醫師の唯今、と申しまして、世間違約の標本の様に、評判致して居りまするが、明後日が明後日に非らず、唯今が唯今にあらぬもの、豈、紺屋と醫師とに限れりといはむや、で御座ります。熟々思ひまするに、世間約束ほど、爲しやすくして、遂げがたきものはありますまい。約束を取りきめまするのは、至極容易くて、これを守り、これをはたすのは、中々以て難いので御座ります。こゝに、試に問を設けて、何故に、約束は取りきめ易くして、守り難く、はたし易からぬか、と尋ねて見まするに、その易い所以は、即ちその難い原因で、難からしむるのは、易からしめたからであるやうに思はれまする。その易いのは、本來から易いのではなくッて、易いが如く誤解したので、この易からぬことさへ、よッく了解してかゝれば、約束とても、さほどに守り難く、仕遂げにくいといふのではありません。更に辭をかへて申しますれば、抑、御約束を取定めらるゝと

きに、篤と前後左右を考へ、所謂、愼重な態度で以て、事をはかられたならば、決して、約束に違犯する樣な不道德なこともなく、また約束の履行の難きを嘆ずる樣なことも、萬々無いことを、保證が出來ませう。つまり初からして、充分に仕遂げらるゝ限りの、充分見込のある約束を取定め、一旦約束した上は、飽までも、これを仕遂げずばやまぬ、といふ覺悟さへあれば、決して、心配はいらぬ譯なのであります。

所が、普通の教育あり、中等以上の位置に在る方々は、約束めいた約束には、滅多に違犯は無いが、約束といふまでゝはない約束、即ちあまり大事にはあらぬ、さほど他人に損害を與へぬ、といふやうな約束は、兎角、苟且になり易いので御座ります。善は小なりといふを以て、爲さゝること勿れ、惡は小なりといふを以て犯すなかれで、如何に些細であらうが、なからうが、等しく、皆、約束である以上は、必、これを守るのが、完全なる人の行爲で御座りますまいか。

のみならずです、これを些細だから〳〵と、打やッて置くがうちに、知らず〳〵、大なる道德上の罪を犯すもので、法律の上の罪には、知らず〳〵といへば、多少

は減等もありませうが、道德上の罪は、そこの點は、嚴酷でなければなりませぬ。殊に、家庭の主人として、未來有望な、第二、第三の國民を、成育なさる丶樣な方には、格別に、この點に注意していたゞかなければなりませぬ。

成程、お小供衆に、おせんの一枚や二枚のお約束は、もとより、大事ではありますまい。併し、感覺鋭敏な兒童にとりては、その違約を憤るの心は、中々強くなくてはありませぬ。それがために、御機嫌が惡い。或はお泣きになる。これは、未だしも忍ぶべしですが、かやうなことが、度重なりましたとき、小供衆の小いな胸のうちに、とゞめ得た印象は、果して何ものでありませうか。

「人は詐るものなり。」「人の約束は信じがたし。」かやうなる教訓は、果して、かやうなる微細な行爲の間に、不知不識、垂れられは致しますまいか。誰れか、これに否と答ふるを得ませうや。おせんの一枚の約束を、履行せられたと否とが、直ちに、この結果に到達せぬまでも、滔々流れ極まれば、深山幽谷、落葉より滴る一點の水も、遂に怒濤と化せぬといふことを、誰れか保證致しますか。

されば、われ〳〵は、呉れ〳〵も、諸媛方に、平生を謹むで、頂きたい。よく

輕々しい擧動を避けて、「安請合」といふことを爲さらず、出來ない約束は、決して爲ない、一旦取定めた上は、必、履行すると、かういふ心懸を持つて、頂きたいので御座りますする。

若し皆樣が、かやうな心地を以て、約束に對せられて、猶かつ、約束履行難を、となへられる樣なことがあれば、我々は、筆を焚き、口を緘んで、最早何をも申しませぬ。

論説

女子の學問

國語科(習字)

岸田松二郎

學校に於ける教科の數量、過多なるが爲に、何れの學科も、充分の効果を收むる能はずして、學校を去るの後は、自から、其の技能却歩し、實際に臨みて、價値を顯はすこと能はず。故に、現今の學校教育は、時に或は、舊時の教育に遜色ある能はずとは、或一部に存する、女子教育攻擊の聲あり。然り、寔に此れあり。然れども、多數の教科を、何故に課せざるべからざるかを詮じ來らば、普通教育として、各、其の必要缺くべからざるの理由存し、日常必須の上より觀れば、或は、閑散の位置に在りと、思惟すべき學科もなきにあらず。只、其の見地より來れる論爭なれば、必ずしも實事にのみ偏して、將來を慮らざるは、進化に伴ふ教育の措置にあらず。されば、教科數量の多寡を論じ、之を增減加除せんとするが如きは、一種の教育論として觀るべきのみにして、現今學生たるもの、或は、既に、學校の伍列を離れたる人々の、如何ともする能はざる所なれば、暫らく、現在の教科目を以て、教養せらるゝものとして考慮せざるべからず。

さて、斯く多數の教科目を配列して、限定せられたる年月の間に修得すべきものあれば、何れの教科も、練習の度を重ぬる能はざるを以て、勢、之を他日の練習に讓らざるべからず。前にも屢いへる如く、學校を以て、大成完結の地といふは、大

なる謬見なり。即ち學校は、社會に出づるの準備をなすべき所にして、總ての業は、社會にいでゝ完成せらるゝものなり。習字の業たる、甚だ容易なるが如くにして、然るにあらず。文字を書くといふの單純なるものに似て、全く然るべからざるなり。形を寫さば足れりと論ずるものあれども、是唯、已むを得ざるに出づるの說たるに過ぎず。能書は、有害なりと斷言するものにあらずして、文字を習ふの暇を以て、之を他の有用なる業に充つべしと、するの論結に過ぎず。能く速かにして、且美しく書き得ることを得ば、論者も亦、之を否なりとするものにあらざるべし。

抑、文字を能くせんとならば、必、先づ、運筆の法を知らざるべからず。而して、運筆の方法たる、古來諸家の說ありと雖も、要するに、筆法點畫の理を說くに過ぎず。既に運筆の理法を知悉したる上は、手指の運用により、目視の精緻によりて、既得の理法を、寫出せんことを習熟せざるべからず。我國の文字は、其の數、頗夥多にして、彼の二十六七文字を列ぬる、外國文字の比類にあらざるを以て、之に習熟せんこと、決して短日月の能くすべきにあらず。實智に務むべき今日に於きて、文字の習熟に多大の時を費すは、誠に惜むべきこととなりと雖も、之をなさずんば、今日の事體に適せざるを奈何にせん。されば、如何なる根事を忍ぶも、之に熟せんことを努めざるべからず。我國の文字は、其の數極めて夥多なるがために、實智修得の障碍たるを憂ひて、萬口一致、之を減輕せんと努むと雖も、將來、輿論の企望を完遂するの時期は、蓋、吾人が泉下に下りたる後なるべきが故に、當代の國民は、猶、此の饒多なる文字によりて、思想授受の苦を忍ばざるを得ず。理

勢旣に斯の如くなるが故に、吾人は、之を以て吾人の心となし、之に習熟せんことは、即ち止むを得ざるの數なりとす。

然らば、則ち學窓に在るの嬢等は、如何なる覺悟を以て之を努めんか。學校の課程より之を觀れば、習字の課業は、大凡、三四時間の時數なるべし。今暫く、毎週に於ける時間を以て四時間とし、一ヶ年の課業を四十週と假定せば、即ち、一年の修業時數は百六十時にして、五ヶ年の時數は八百時なり。今假に、小學校に六年を費し、高等女學校に五年を費すものとせば、前後通算十一年なり。此の十一ヶ年に於ける習字時間を、前比によりて積算せば、千七百六十時間を得べし。嚮に、小學校令の改正頒布せらるゝや、尋常小學校の生徒だも、猶且、千二百字内外の文字を學ばしめざれば、義務敎育を、果すに足らざることを認められたり。之より以上の程度なる、高等女學校に於ける文字の數、果して幾何ぞや。若し、之を少數とするも、三千以上の數と認めば、蓋、大差なかるべし。果して然らば、小學校の初より高等女學校に涉りて、文字を習ふの割合は、少くも、毎時、必、二文字を練習するものとならざるべからず。而して、又、楷行草の三體に習熟するを期せんには、此のまた三倍たるべく、さすれば、毎時必、六字以上の文字に接せざるを得ず。如斯の數量を以て、之を積算するは、固より、大體に於ける計數に過ぎずと雖も、蓋、其の數遠からざるべし。

計數の示す所、既に斯の如くなるが故に、學校に於ける習字は、其の熟せんことを主とするよりも、寧、習熟の方法を闡明せられむことを希ひ、多年の工夫を積みたる、師の指導に意を注ぎて、一言一語を疎かにせず、能く其の方法を質問し、又、

師がなせる運筆の狀態を觀取して、專、習熟の方法を、詳悉し置かんことを覺悟せざるべからず。既に其の方法を學びつゝ、自身に之を試みて、猶且、其の疑はしきを質し置かば、他日師に離るゝ後と雖も、之を反覆し、之を工夫して造詣せんことは、各自の努力如何に存するものなり。されば、學校に在る間は、指導を受くるの時期にして、學校を出でたる後こそ、習熟完成を期すべき適地なれども、世の多くを視れば、卒業は、即ち、廢業の異名視するは、蓋、謬見なるなからむや。世人皆云ふ、女子一たび他に嫁がば、家事萬般に鞅掌して、其の他を顧みるに暇あらず。況や子女を設け、之が鞠育の事に膺るに於てをやと。此の說、亦其の理なきにあらずと雖も、苟も、一たび習得したる事業を曠廢し、多年の辛苦を、歲月と共に消散せんこと、豈、恨事なるなからむや。四六時中心身を勞して、採薪と育兒とに致さゝれば、以て、其の口を、糊する能はざるものは詮なし。然れども、其の窮、斯の如く甚しからざるものは、決して、毎日一時、若くは、半時の執筆すべき餘暇なきものは、あらざるべし。惟ふに、時は金錢なり。能く之を用ゐれば、敢て、其の足らざるを憂ひず。雜談の時はあるべし。觀劇の時なきにあらず。只、其の節用如何にありとす。金錢を惜むを知りて、時間を愛しむを知らざるは、學問あるもの丶行爲にあらざるべし。女子は、兎角に、筆を執るの必要に迫られざるがため、自己に書き得ることも、之を他人に依賴し、或は、自から之をなすを以て、謙德を損ふものなりと、思惟するが如き傾きなきにあらず。之が爲に、歲月と共に退歩し去りて、全く、其の技倆を銷磨するに至り、遂には、己の子女が修學の時に至り、却つて、其の子女

に輕侮の念を起さしめ、併せて、母たるの威重を失墜するに至るなり。見よ、甞て本誌上に掲げて、紹介されたる梅颸女史の筆蹟を。又見よ、同女史の文章和歌とを。いかに端麗にして、いかに高雅なるか。嗚呼、天下の俊傑、碩學山陽先生を生めり。嗚呼、此の賢母にして、此の偉人を養へり。蓋大人豪傑は、優麗端荘なる女子の產物にして、閨秀の德器は、自ら努むるに成れり。豈、口を時なきに藉りて、逸遊荒廢すべけむや。

國語學につきて（承前）

（國語漢文專修會講演）

大宮兵馬

今日の我國の言語は、如何なるものぞといふに、先、國内一般の通俗の言語についていへば、明治御維新の以前には、三百諸侯といふものがあつて、國々境を異にし、守りを堅くしてあつて、東西南北の人々が、互に交通往來することは、容易でなかつた。德川幕政三百年の長い間、人民相互の間に垣を作られて、各自の交通を、遮斷せられてあつたから、其の土地とか、氣候とか、習慣とか、それ等の種々の事柄から、一種その地限りの、方言がだん／＼多く出來て、薩摩の人と、陸奧の人とは、通辯がなければ、全く話が出來ぬ樣になつて居つた。

然るに、御維新以後、中央集權の政を執られてからは、其の杜絶し、懸隔して居つた各地の方言も、追々親密になり、段々一致せんとする勢は、今日十分に見えて居る。殊に、東京の通用語で話せば、如何なる者にも、大抵わからぬことはない。但し、今でも、薩摩の老人と、陸奧の老人とが、出會ひて話すなどは、隨分困難でもあらうが、吾

々年輩前後の者には、さういふ困難はない。それは、國内に於ての、人民の往來交通が、かやうに盛になつたからである。國民相互に、言語がよく通ずる樣にあるのは、極めて結構であるが、茲、に少しく思はねばならぬ事がある。明治維新以後、今日に至る國民の言語は、余程發達したるか、また、爲つゝあるかといふに、決してさうでない。維新以前に於ては、今日の樣に交通が盛んでなかつた故、地方限りに行はるゝ、言語の種類の多かつた事は、既に述べた樣である。されども、その方言は、自然の變遷によれる者なれば、その言ひ方の順序、即ち、言葉の筋が極めて正しかつた。然るに、維新後は、字を書き、本を讀む者が、段々多くあつて來て、その影響によりて、却つて、言葉の言ひ表はし方が、亂りがはしくなつた。それは、漢文を無法に直譯して、よんだり書いたりした故、それが、國語の規則を破る事になり、その讀みたる書物の方から、俗言が、變化せらるゝ樣になつて來た。殊に、歐米の文物が輸入せられてより、佛蘭西の言語、英吉利の言語、獨逸の言語を直譯して、用ゐる事が、多くあつた。それ等は、みな語脈が、外國人の物の言ひ方であつて、國民の、自然の物のいひ方に戻つて居る。今日、書生仲間の話などは、老人には、半分も聞取れぬ事がある。これは、老人等の覺えてある自然の言語と、その言方が、いたく異つたからである。さて、役人には、役人の言語があり、法律家には、法律家の一種奇體なる言語がある。その他、社會社會、その組合組合に於て、又は、ある階級々々、業務業務、に於て、漢文直譯とも、歐文の飜譯とも取れぬ、一種の言語が出來て居る。さすれば、現在の普通の國語は、横幅は、東西南北の通じがたか

つた語は、親密になつて來て、喜ぶべきだが、縱に於て、即ち、種々の階級團體等に於ては、言語の道が塞がれて、狹くせられてある。これ實に、宇宙間の、奇怪千萬なる異樣の現象である。誠に悲しむべく慨くべきである。却つて、德川時代には、役人の文章も候文、人民の文も候文にして、文章と言語との間には、今日ばかりの、大なる間隔はなかつた。その三百年の太平も、思ひ合せらることである。

畢竟、文章が正しければ、通俗の言語までも正しくなり、言語が亂るれば、文章もやがて亂るゝもので、その影響は、國家の治亂の因となるものである。實に、國語は、一國の生命である。國語を混亂するは、其の國の生命を、短縮せしむるものである。吾々が、種々の事を覺え、種々の事を考へて居るも、皆、國語の媒介によるものである。

また、國民は、常に、國語によりて團結せられてあれば、國語の正しきは、その團結の鞏固なるものである。實に、一國の生命であるこの國語が、今日の樣に亂されて居ては、この國の生命が、段段と縮んでくるやうで、心細きことである。さりとて、これはいくら歎いても、過去の事は仕方がない。徒に歎かんよりは、今日以後の國語は、如何なる方法をとりて、如何に修繕せねばならぬと、いふことを、攻究せねばならぬ。これにつきて、聊か、考へて居る所を、御相談として、今日、ここで申述ぶる譯である。今、茲に御會合の方々は、いづれも國語漢文については、熱心ある人と思ふから、諸君に御相談申すのである。諸君も、能く、私の意のある所を聞取られて、御銘々に、御攻究を願ひたいと思ふ。

今日以後の事業としては、既に、時機後れたりと、

申すのであるが、今日まで、手を着けてないから仕方がない。そこで、國語のために、今日計らねばならぬ火急なる事業には、普通の事業と、専門の事業との別がある。専門の事業は、國語を以て、専門として居る學者でなければ、出來ぬ事であるから、先、これは、その人に、一任して置いて宜い。普通の事業は、學者がやつて呉れるからといつて、待つて居てはならぬ。國語は、國家の生命であるから、國民としては、亂れた國語を修繕せねばならぬと、感じた上は、誰も、直接になり、間接になり、之を助けて行かねばならぬのぢや。今日國語について、將に着手すべき普通の事業としては、その第一には、通俗語を一定せねばならぬ。これは、維新以後今日に至りても、方言など は、追々一定しつゝあるから、此の儘で置いても、早晩一定するに相違はない。北海道、琉球、臺灣等の士人もあれども、これも、政府から、相當に世話をして居るから、これらも、遠からず一定するに相違ない。されど、彼の各階級團体の、奇妙なる言語を一定せしむることは、極めて難きことである。

これを一定せしむるには、先、普通文の一定を計らねばならぬ。吾國の普通文といふものは、恐らく、今日は全くないと思はるゝ。政府の法律などは、國民全体の頭に被せたる者であるから、その文章は、極めて、普通なるものにせねばならぬ。然るに、法文中には、専門の學者でなければ、讀み得ぬ言語が多くある。民法などは、殊に、其の甚しいものぢや。また、近年の新版の書類には、一種新熟語を作りて、態々むづかしく書いてある。此等の語中には、英文の直譯もあらう。獨逸文や、佛文の直譯もあらう。或は、漢文の直譯もあらう。

これらは、大抵、固有の國文とは相戻りて、國民の言語とは、調和しがたきものである。また、今日の手紙の候文も、候といふ文字が、其の間にあるだけ、むづかしき事が多くあつた。種々異樣なる書方がふえて來た。迚も、德川時代の候文の樣な、一定したるものではない。

手紙は、今日の話を通ずる機關である。電話の代りに、書いて送る文章である。故に、第一に一定せしめねばならぬ。然るに、學者の手紙、役人の手紙といふ樣に、全く異つて居る。そうかと思ふと、近頃は、言文一致の議が盛に起りて、何事でも、皆、言つて居る通りに、書くがよいと申して居る。これは、實際に行はれたらば、便利なるには、相違ない。讀賣新聞には、此の間より、博士先生方の論文が見えてある。中々に面白い。けれども、今日の言葉を、其の儘文章に書き止めて宜いかといふに、それは賛成が出來にくい。言文を一致せしむるには、先、言語を一致せしめねばならぬ。而して後、言語と文章と兩方から、相近づけて行かねばならぬ。それまでには、相當の準備がなくては叶はぬ。これには、言語の諸方面から、精密な調査を要することである。唯、現在のいふ詞の通りに、書く樣になれば、今日の人だけに、わかるとしても、子孫の代に、更に通じがたき者になる。かく亂れたる言語を、その儘に書き立てては、全く文章の品位は、ないものとなる。文章は、國體上よりも、一向釣合ぬ者である。また、さやうの者は、長く、世に用ゐられべきものでない。然れば、今日の言語のドレだけ迄を、その儘に、文章として、書いてよいかといふ、その標準をも定めねばならぬ。これは、徐々と、言文一致を計るべき良法である。而して、最初にまづ、俗

語の文典を作ることが必要である。今日は、中等教育の教科中におきて、國文典を教へて居る、その教へる文典は、如何なるものであるか。全く、役に立たぬものでないが、大方迂遠千萬なるものである。

（未完）

精華

日本女訓（未定稿）

川崎重陽

三十一、舅姑、夫は更なり、他人より、我が身の心づかぬ事などを、つげ知らせらるゝことあらば、ことに、喜びて、之を受くべし。つゆばかりも、不滿の色などあるべからず。

三十二、つねに、質素を旨とし、あらかじめ、自家の收入をはかり、支出をば、かろく定めて、固く、これを守るべし。かくして、一家の生計、確實ならんには、夫に、内顧の憂なく、また、廉恥を重んずる家風も、おのづから立ちぬべきなり。

三十三、萬事に、節約を行ひて、餘財あらば、力に應じて、世に、賴なきものを救ふべし。家を保ちて、德を積むは、人の最重すべき務なり。

三十四、もし、一家の風、吝嗇ならんには、親族、近隣のしたしみをやぶり、世間の怨をも招くに至らん。かくては、家政、如何ばかり、よく整ひたりとも、一家の面目立ちがたく、つひには、禍をもかもすことあらむ。

三十五、器物、家具を整頓し、よく、室の内外を

掃除して、清潔をたもつべし。又、晨起、就寝、食事などにも、時刻を定めて、萬事に、規律を正しくすべきなり。

三十六、婢僕をめしつかふには、すぢめ正しきを、もとゝし、いさゝかも、愛憎の偏頗なく、一へに、思やりふかくして寛なるべし。ことに、婢は、家の内に使はるゝものなれば、暇あらば、よみかき、裁縫などのわざを習はせ、日常の行儀作法をも教へ、引きたつる心にてめし使ふべし。かくせんには、おのづから、懐きしたがひて、主從双方の爲に、よかるべし。雇人なりとて主人の權威をかゞやかしてのみ、おひ使はんとは、ゆめゆめ思ふべからず。もし、また、召使に、よからぬことあらば、人なきところにて、懇に、とき諭して、改めしむべし。決して、叱り責めおどすべからず。

三十七、婢女、數多めし使ふ家にても、臺所のさしづは、主婦、みづからし、ことに、食物の調理は、老人の嗜、夫の好に合はしむるやう注意すべし。

三十八、來客をば、厚くもてなすべし。食膳の献立、よくとゝのひて、如何に、美を盡したりとも、主婦をはじめとして、家人のよそ〴〵しげなるは、まことの饗應にはあらざるなり。

りん女の貞順

指原乙子

筑前國那珂郡薬院出口といふ所に、六助とて、いとも貧しき農夫ありき。そが女りんと呼べるは、先つ年より、士人の家に仕へしが、心樣さかしく、萬にまめやかにて、みめかたちさへうるはしかり

しかば、深く主人の心にかなひ、情をかけて召仕ひしが、やう〳〵年長けしにぞ、同じ所に住める羽助とて、少しの田畠をも持ちて、其の日の生計には、事かゝぬ程の者を撰みて、りんを嫁がしめぬ。

さるに、夫の羽助は、性質氣あらく、酒を耆み、日毎に醉ひ狂ひては、りんを、さいなみ打ちたゝく事もしば〳〵なれども、りんは少しも怨む色なく、只、一言のいひわけだにせで、夫の言葉に從ひつ。夫、他に出づれば、歸らむ頃をはかり、沐浴の用意、食物の事など、至らぬ隈なく心を盡し、そが上にも、醉ひしれて、聲をいらゝげいかり狂ふとも、只、夫のいふがまに〳〵改めけるにぞ、近隣の者どもも、其の行を感ぜぬはなかりき。りんが親戚の者共、羽助が振舞をいとひ、りんをあはれみて、離別を乞はんことを勸めけるに、一

度嫁せし上からは、たとへ、如何やうにつらしとて、いかで、妻より離別を乞ひ侍らんやとて、更にうけひかず、只管まことを盡して事へけるに、やがて、男女三人の子を擧げしが、享保十七年、歳荒れて、飢餓にせまる者さへ出來しかば、羽助は、妻を養ふ力なしとて、なさけなくも追ひ出しぬるにぞ、りんは、幼き女を携へ、以前の主人のもとに至り、初にまして、まめやかに仕へけり。かゝりし程に、羽助は、程なく身まかりて、そが男子も、いまだいとけなかりしかば、りんは、又家に歸り、野邊の送りも懇に營み、ひるは、田畠に出でたがやし、夜は、織り縫ふ業に力を盡し、からくも三人の子を養ひしが、未だうら若き身なりしかば、再嫁を勸むる者もありしかど、更に耳にも入れざりけり。

かくて、りんが先に仕へし主人も、今は世を去り

しかば、その忌日には、必、墓にまふで、花をささげ、水を手向け、在すが如く事へけるにぞ、其の當主もいたく感じて、厚く、りん母子をいたはりけり。

二人の女も、母に似て心やさしく、各々、士人の家につかへ、男子も成長するまゝに、父の跡をつぎて、田畠をたがやしゝかば、りんも、やう〳〵老をやすく送りしが、いつしか領主の聞に達し、實に女のかゞみぞとて、厚く賞せられしとなむ。

りん女が行は、異なるふしもなきやうなれども、其の婦徳第一なる貞順を守りて、忍びがたきを忍び、かよわき腕にて家を興し、終に女のかゞみとなり、美しき名を後の世に止めしは、豈、其の故なからずやは。

家政

鼻の養生

ドクトル 山上兼輔

人の耳目口鼻に於ける、何れも優り劣りは無き筈あれど、どういふものか、世の人、目には常に注意し、少しく異常あれば、直ちに、醫師に向つて治療を乞ふ。處が、耳や鼻の病にあると、餘程の疼痛にても無ければ、之を等閑に附して、遂に慢性症と爲し、或は、不治の症に陥ることが屢ある。依つて、曩には、耳に就いて注意方を述べてあつたが、今回は、鼻に關して、聊、話して見たいと思ふ。

鼻は、内外二部に分たれ、或部は硬き骨、或部は軟かき骨より成つて居るが、又、薄き骨板、即ち鼻の障子に由つて、左右に分れ、空洞を具へ、其の内に、複雑なる搆造ありて、粘膜に被はれ、呼吸の門となり、かねて嗅覺を司どることは、世人の熟知する所である。而して、其の周圍の關係、並に、他の機關との交通密であるので、鼻に疾病があると、其の累を他に及すことが屢ある。例へば、俗に、腦病と稱ふる頭痛、眩暈、事物に倦み易き等の症の如き、其の原因は、往々鼻にあるやうである。

外鼻孔に生ぜる鼻毛は、恰も樹林の如く、呼吸の門にありて、寒風を防ぎ、鼻腔内の温を保ち、又、涕汁の流出を防ぎ、隨つて、常に濕潤を帶びて、空氣に混じ來る、塵埃等の這入るのを防ぎ、餘程大切なものである。故に、鼻毛は、漫りに剃り去るべきものでない。然るに、世人は、鼻毛の長きは、女に甘き目標とか何とか云つて、努めて之を剃り去り、或は、拔き取ることがある。此等は、無稽の甚しきものと云はねばならぬ。但し、鼻毛の餘りに長く延び出て、可厭感ずるときは、少しく、之を剪み去るもよからう。また、理髪店にて、之を剃り去るの際、微傷を受け、夫れより、皮下蜂窠織炎、又は、顔面ロース等の恐るべき病を誘き起すことがあるから、能く注意せねばならぬ。

世間には、間々指尖にて、頻りに、鼻を抉る癖の人がある。處が、爪尖で鼻粘膜を傷け、爪間の汚物、即ち黴菌が之より入つて、炎症を起すことがあるから、之れも亦、誡しむべきことである。

また、毎朝面を洗ふとき、或は、入浴の終りなどに、冷水を鼻腔に吸ひ込めば、感冒せぬと云つてす

る人がある。これは、輕く淺く行ふのは可いけれど、急に深く之を行ふときは、鼻咽腔より耳に通ずる管に、冷水が這入つて、之が爲めに、中耳炎といふ、重き病を起すことがある。また、注意せねばならぬ。

全身中、出血し易い處は、鼻の右に出づるものはない。世間に、我れこそ、一回も衂血せしことなしと云ふ人は、恐らくあるまい、その原因の如何を問はず、或は、毒血が出る抔と稱して、一向注意もせず、その出るが儘に捨て置き、極度の貧血に陥ることが、間々ある。夫れから、通常の鼻の出血し易き處は、餘りに深からざる所にあるから、大抵は、拇指と示指で、固く鼻翼を摘むときは、一時、血止めすることが出來る。若し、夫れでも止まざるときは、速に、醫師に謀らねばならぬ。

喘息の原因、鼻病より來るものあるは、吾人の、屢見る所であるが、その他、少年中、殊に處女の患ふる輕き腦症の多くは、鼻の慢性病に發するといふことは、世人の夢想だもせざる所であらう。何故といふと、試みに、その患者に就き、その容體を問へば、二三年來、頭痛、眩暈、事物に倦み易く、讀書、裁縫にも長く堪へ難く、且つ、記憶力も衰へたりとて、鼻に就いては、一も訴ふる所がない。再び鼻に關して之を問へば、唯、感冒せしときの如く、鼻の通り少しく宜しからずとか、又は、近來鼻汁稍多しとか、言ふに止まり、鼻に就ては、聊も、意に介せぬやうであるからである。かくて病者は、知らず識らずして、適當の治療を怠り居るは、吾人の屢實驗する所であるが、誠に、遺憾な次第である。

鼻病は、精神機關との關係、殊に密であつて、瑣

細の事より、種々の症を起すものであるから、成べく初めに、適當の治療を加へ、慢性、又は重症に陷らしめぬやう、注意せねばならぬ。之を要するに、初めにも言へる如く、鼻の養生も、亦目と一樣に注意し、少しく異狀あらば、速に醫師の診察を乞ひ、之を忽諸に附することのないやうに致したいものである。

だいどころ

常盤味噌

常盤味噌を製るには、上等赤味噌を、擂鉢にて能く擂り、裏漉にかけ、柚子の乾皮、及び、椎茸の軸を去り、かさばかり暫く水に浸し置きて後、しぼりわげ、ともに、こまかにきざみ、味噌の中にいれ、味淋にて、能程にゆるめ、文火にて、こげつけぬ樣に煮つめるなり。而して、冷めたる時、胡麻をいり、皮を去りしもの、又、山葵を能く洗ひ、短冊にきりたるものを、交ぜるも宜し。又、生柚子をいるゝもよろしけれど、永く貯へ置くには、乾したるをよしとす。だいどころする人は、この味噌を貯へをけば、調法なり。此の味噌は、永く貯へ置くも、味の變らぬより、常盤味噌といふ。田樂、湯豆腐抔の味噌に、極てよろし。又、酒を好む人には、時により、有合の刺身二三片も、椀にいれ、この味噌少しいれ、熱湯を注ぎ、ふたをして、暫く置きて用ゐる時は、味よき、味噌汲物は出來るなり。

柚子の淡煮

能く熟したる柚子を二ッに割り、たねを去り、皮つきのまゝ、薄く月形にきり、丼樣の器にい

れて、沸騰湯を充分にかけ、暫く、其の儘におき、其の湯を捨て、白砂糖をふりかけ、更に湯を少しさし、ふたをおしおけば、砂糖はとけて汁となる。柚子を皿に盛り、汁をかけて出すべし。あっさりとして能きものなり。柚子五つに、砂糖を、大匙五杯位の割合にてよし。

小かぶ辛味漬

小かぶを能く洗ひ、葉を少しのこしてきり、ざっと鹽おしにして、唐からし、柚子の皮、能程にきり、交せ合せ、柚子の絞酢にて漬け、醤油を少し加へ置けば、一寸、能き香の物なり。



學藝

國文學講義

井上頼文

紫式部日記講義(二十四)

うまの時に、空はれて、あさ日さしいでたることちす。

たひらかにおはします、うれしさのたぐひもなきに、をとこにさへおはしましけるよろこび、いかがはなのめならん。

昨日、しをれくらし、けさのほど、あさぎりにおぼ〵れつる女房など、みなたちわかれつ〵やすむ。御まへには、うちねびたる人々の、か〵るをりふ

し、つきぐしきさぶらふ。

釋義

○うまの時、　寛弘五年九月十一日の午の時なり。午の時は、今の正午十二時。

○空はれて云々、　いかゞおはすらんと、諸人が心配したる、中宮の御産も、御安産なりしゆゑ、はじめて安堵して、心のおちつきたるさまを、曇りふたがりたる空の、こゝちよく晴れて、旭日の、のどやかに、さし昇りたるにたとへたり。俗に「夜が明けたやうな」と、いへる心ばへなり。増鏡、うちのゝ雪の巻に、後嵯峨天皇の生れさせ給へるところに、

ひつじのくだりほどに、すでに、ことなりぬ。宮の御せうと、公相の大納言、皇子誕生ぞや、と、あざやかに、のたまふを、きく人々のこゝち、夜のあけたらんやうなり。

と、いへるさまなり。

○たひらかにおはします、　御安産あそばしたりとの意。

○をとこにさへおはしましける、　御誕生と申せば、御女子にても嬉しきに、まして、かく御男子の、御誕生あそばされたるは、甚、めでたく、よろこばしき御事なりとの意なり。これ、すなはち人皇六十八代のみかど、御諱は、敦成と申し、長和五年二月七日、御位に即かせたまひ、長元九年四月十七日、御年廿九にて、崩れさせ給ふ、これを後一條天皇と申したてまつる。

○いかゞは、　何しての意。

○なのめならん、　なのめは、大概、おほかた、などいふ意にて、こゝは、なみ大抵の事ならんや、決して、ひとゝほりの、よろこびやうにあらずとの意。

○昨日しをれくらし、　きのふ(十日の日)は、一日心配して、元氣もなく暮しゝとあり。
○けさのほど、　今十一日の朝の間。
○おぼゝれつる、　おぼゝれは、朧などゝおなじく、ボンヤリする事なり。清水氏の釋には、朝霧は、おぼゝれつると、いはんための文のあやなり。おぼゝれつるは、ウロ〳〵シタルなりと解せり。
○たちわかれつゝやすむ、　立ち別れ〳〵して、おのれ〳〵の、局にかへり、休息すとの意。
○御前には、　中宮の御前には、なり。
○うちねびたる人々、　年長の人々なり。
○つき〴〵しき侍ふ、　つき〴〵しとは、相應ある意にて、すなはち、適當なる人々が、御前に伺候す、との意なり。

十一日の正午十二時ごろにいたりて、やう〳〵御安産ありしゆゑ、諸人はじめて安心したれば、曇りふさかりたる空の、すゞやかに晴れて、朝日のさしいでたる心地す。
御安産あそばされたといふばかりにても、嬉しさの比類なきに、まして、御誕生あそばされたるは、玉のごとき御男子にさへわらせられたる御よろこび、ドレホドの御滿足ならんか、決して、なみ大抵の御滿足ではあるまじ。
昨日一日、御産の事を心配して、元氣もなく暮し、今朝の間は、朝霧におほはれたるごとく、ボンヤリしたる女房たちが、いづれも、安堵して立ちわかれ、立ち別れして、自分〳〵の局に歸りて休息す。
さて、中宮の御前には、年長けたる人々の、かゝる御産後の御養生を御注意申しあぐる、をり節に、

適當の者ども伺候す。

漢文學講義

佐々木天遊

樂山窩記

鹽谷岩陰

樂水子。以二樂山一扁二其窩一或嘲レ之曰。子庭無二一綫之水。一拳之山。其足亦未下嘗渡二六合一而西上也。則何山水之所二觀且樂一也。樂水子不レ能レ答。寢而思レ之。若レ有二語者一。曰子家。車轂擊レ於レ前。而馬跡交レ於レ後。而入二其室一。彈二其琴一。則有二高山流水之音一。讀二其詩一。則有二雲峰烟波之思一。叩二其心一。則巍然如レ山。淡然如レ水。其足雖レ未三嘗渡二六合一。然其心已發二蓮岳之秀一。而吸二琵湖之清一矣。則所レ謂山水者。在レ室。而不レ在レ庭。在レ心。而不レ在レ物。其爲レ樂有下可二以獨會一。而不上レ可三以共二語一者上。子何必答レ之之爲。言終

而覺。乃試把二枕上之琴一與レ詩。而對レ之。胸襟如レ刷。恍然聞二水音之潺湲於レ耳底一。而看三山光之蒼茫於二眸中一。

樂水子、樂山を以て其の窩に扁す。或之を嘲りて曰く、子が庭、一綫の水、一拳の山なし。其の足も亦、未だ嘗て六合を渡りて、而して西せざるあり。則ち何の山水を觀、且、樂む所ぞや。樂水子、答ふる能はず。寢て而して之を思ふ。說る者あるが若し。曰く、子が家、車轂前に擊ちて、而して馬跡後に交る。而して、其の室に入り、其の琴を彈ずれば、則ち、高山流水の音あり。其の詩を讀めば、則ち、雲峰烟波の思あり。其の心を叩けば、則ち巍然として、山の如く、淡然として水の如し。其の足、未だ嘗て六合を渡らず雖も、其の心は、已に蓮岳の秀を發して、而して琵湖の淸を吸ふ。則ち、所謂山水なるものは、室にあり

て、而して庭にあらず、心にありて、而して物にあらず。其の樂みたる、以て、獨り會すべくして、而して、以て共に語るべからざるものあり。子、何ぞ必しも、之に答ふることを、之爲んやと。言終りて、而して覺む。乃、試みに、枕上の琴と、詩とを把りて、而して之に對すれば、胸襟刷ふが如く、恍然として、水音の潺湲を耳底に聞き、而して、山光の蒼茫を眸中に看る。

樂山窩の記、　記とは、兼ても申上げました通り、事を紀すの文でありますが、是に叙事體と、議論體と、又、半叙事、半議論體等の、種々の體裁がありますが、今、此の樂山窩の如きは、殆ど、議論體の記文であります。

偖、樂水子と號する人がありまして、樂山と云ふ名を以て、其の自分が居る所の室に命けまして、即ち、自分の住ふて居る所の家を名づけて、樂山窩と申しました。（樂水樂山は、水を樂み、山を樂むと云ふとにて、もと〳〵論語の雍也編に、智者樂レ水仁者樂レ山と、あるに本づきて、樂水樂山と云ふ名を、附けましたものとみえます。窩とは、字彙に、凡別墅獨處皆名レ窩とありまして、別莊、又は、獨住ふて居る處を、皆名づけて、窩と申しますが、先樂山室とか、樂山居とか、樂山齋とか云ふことに、同じこと〻心得てをれば、宜敷く御坐ります。扁とは、説文に、署也。署レ戶之文也と、ありまして、樂山なれば樂山、樂水なれば樂水と、署し名づくることであります。）

ソコデ、或人があつて、之れ此の事を嘲り笑ふて申すには、子、其許の庭には、タッタ、糸一縷程の細き流の水（綫は、線の古文字なり。線は縷なり。）があるでもなく、又、タッタ、土一塊程の低き山（一拳は、ヒトツカあり、一拳之山は、一塊の土を、

積重ねた位の、卑き山と云ふことなり。)が、あるのでもない。サレバトイフテ、外に名山大水でも、看たと謂ふ譯合でもなくして、其の其許の足も、亦、マダ嘗て、以前より六合川(六合は、六合川のことなり。或は六鄕に作る。)を渡りて、ソウシテ、西の方の土地に、往たこともないのぢや。(茲所の也の字は、決語なり。)サスレバ、水と云ふ程の水も、みたこともなければ、山と云ふ程の山も、みたこともない筈ぢや。サスレバ、則ち、何の何處の山水を游觀し、且又、玩樂する所のものがあるであらうぞ。游び觀るべきの山も、玩び樂むべきの水も、見たことさへもあるまい。サルヲ、其許は、自ら號して、樂山と云ひ、自ら扁して、樂水と云ふが、何處の山、何處の水を樂む積りで、ソンナ名を附たのであるかと、嘲笑しました。(茲所の、也字は、決語にあらず。語勢の餘なり。)

所が、成程、或人が申しました通りで、庭上に山水あるでもなく、又、嘗て、游歴して、名山水を觀て、樂むだと云ふ、譯合でなきものでありますから、ハタト行詰りて、樂水子が。或人に答辯をすることが出來ませぬ。ソコデ、寢て横になりて、サウシテ、之れ此事を思ひ考へて、何と返答しやうかしらんと、思案を致して、眠りに就きました。所が、誰かは知らねど、丁度、樂水子に語り告る所の人が、あるやうで御座りまして、(夢の中でありますから、若レ有二語者一。と申したものであります。)其の者が申しまするには、子、其許の家は、中々雜閙の所で、車と車との轂が、行合ふて、路の前に撃ち、(轂輻所レ湊と申して、車の輪の眞中の、日足の湊り合ふ所を云ふ。)ソウシテ、馬の蹄跡が、路の後に交り續き合ふて、馬や車などが、絶えず、前後に往來して、騷々敷場所でありて、

勿論、水や山などのある樣な、閑靜な所でない。成程、或人が、一綫之水なく、一拳之山なしと、嘲笑した通りである。ソウデアルケレドモ、其許の室、部屋に入りて、其の琴を彈じて引くときは、則ち其の時には、峩々として、高き山の聳ゆるが如く、洋々として、深き水の流るゝが如き、音調があり（高山流水の字は、呂氏春秋に、伯牙鼓レ琴、志、在二高山一、鍾子期曰、巍々乎。志、在二流水一鍾子期曰、洋々乎。云々と、あるに本づく。）て、山と水とが、琴の中にある。又、其の其許の詩を讀誦するときには、則ち其の時には、其の詩の趣味が、漂緲として、雲峰の聳ゆるが如く、浩蕩として、煙波の漂ふが如き、思がありて、詩の中に、山と水とがある。又、其の其許の心の中を、擊ち叩くときには、則ち其の時には、心中の巍然として、つきたちたることは、山の如く、淡然として、心中の淡きことは、水の如くにして、山と水とが、心の中にあるので、其の其許の足が、マダ、嘗て以前より、六合川を渡りて、西に往きて、山と水とを、觀たことがないと云ふと雖も、然れども、サレド、其の其許の心の中には、巳にハヤ、蓮岳、富士山の秀で聳えたる、靈氣を把りて食ひ、（蓮岳は、富士山のことなり。峰頂八朶に分れて、蓮華の形あるよりして、蓮岳と云ふ。餐は食ふことなり。）ソウシテ、琵湖、琵琶湖水の、清く湛へたる波光を汲みて、吸ふたのであるから、足、六合を渡りて、西せずとも、固より、妨なきことである。（矣の字は、截然と緊殺て、結ぶ時に用ゐる助字なり。）

ソウシテミル時には、則ち、所謂其許が申す所の山と水とは、室、部屋の中にありて、其の室に入りて、其の琴を彈ずれば、高山流水の音があり。其

の詩を誦すれば、雲峰煙波の思がありて、其許の所謂山水は、室内にありて、ソウシテ、庭上にはないのである。又、其許の所謂山水は、巍然として、山の如く、淡然として水の如き、其許の心中にありて、ソウシテ、塊然たる山と、冷然たる水との、物體にはあらずして、無形の心中にある、無形の山水であるので、其の樂と云ふものは、以て唯、自分獨のみが會得すべくして、(會は、合なり。會得することあり。)ソウシテ以て、コンナ樂みであると、人々向ふて、共に語り告くべからざるもので、あるのだからして、其許獨で、會得してさへをれば、それで宜いので、子其許よ、何ぞ必しも、是非にソー、(何必は、接語にして、反折の辭あり。是非にソーと、云ふ程の意なり。)或人の嘲に、答へ答辯することをしやふに、自分獨で、會得して、樂むで居れば、それでよい。

必しも、或人に向つて、答辯するには及ばぬことである。(答レ之之爲、上の之の字は、或の字を指し、下の之の字は、答の字を指す。答辯此の事をと云ふ意なり。)と告げて謂ふ言葉が、終りシマツテ、ソウシテ、夢が覺めました。

乃ち、ソコデ、夢中の人の告に從ふて、試に、鹽梅みに、寢て居る所の、枕の邊にある所の琴と、詩卷とを把りて、之の詩卷と琴とに、對し打向ひて、詩を誦し、琴を彈じてみました所が、氣分が誠に清々しくして、胸襟、胸中や、襟元、即ち胸の中が、サツパリとして、刷ひ拭ふて、清めた樣にありて。恍然、ウツトリトシテ、何處とはなしに、水の音の流れて、潺湲、ショロ〱たる響を耳の底に聞き、(潺湲は、ショロ〱と、水の流るゝ響を謂ふ形容詞あり。)ソウシテ、又、山の光色の蒼茫と、靑々としたる山色を、眸子の中に看る樣な心持が

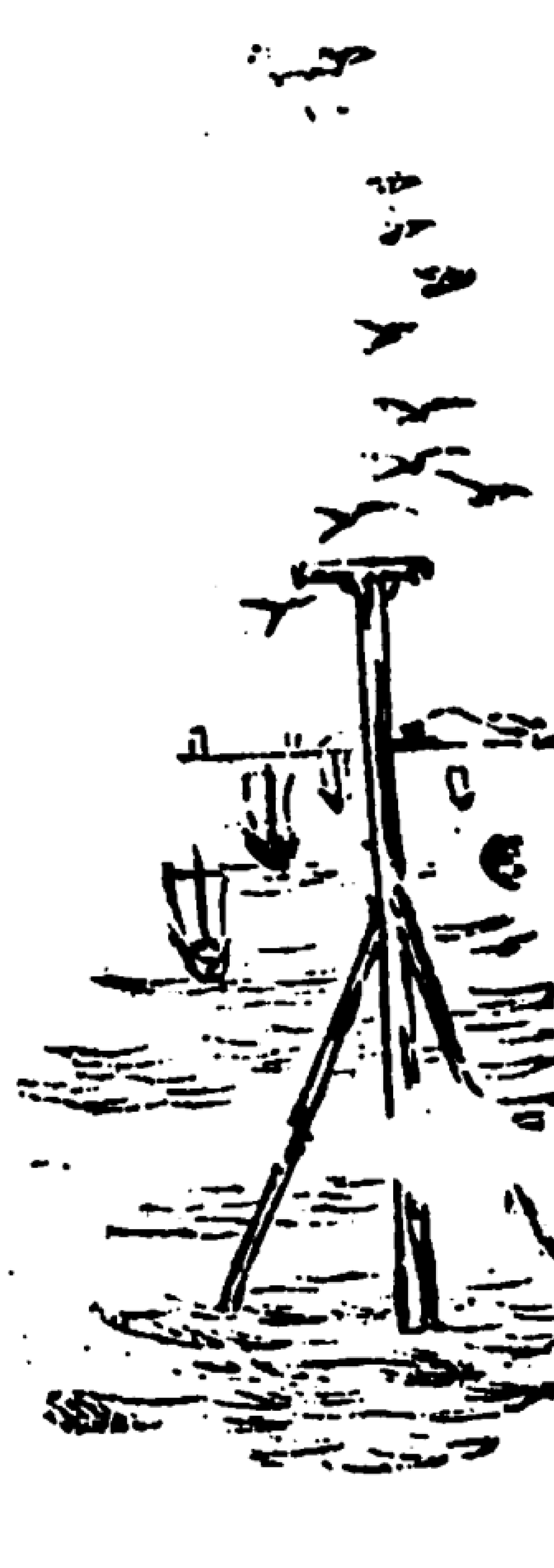
致しまして、樂水子の心中には、蒼茫の山、潺湲の水を觀、且つ樂む樣な心持になりました。サレバ、庭上に一錢の水なく、一拳の山なくとも、足未だ六合川を渡りて、西せずとも、自ら號して、樂水と云ひ、自ら扁して、樂山と云ふとも、固より何の妨もなきことである。

一錢の水、一拳の山なくして、而して樂山と名づけ、樂水と號したるよりして、無形の山水を持來りて、點化して、一編の文章を作りましたもので、是が、所謂無中に、有を生ずる文士の手段であります。ソウシテ。結末に至りて、縹緻の筆を以て、結ばざるが如くにして結び、悠然として、亦、雲峰煙波の思があります。ドウカ、能々御玩味あらんことを、希望致します。

○家計簿記講義（承前）

磯部　武者五郎

前號には、日記帳に記入する式だけを掲げましたが、今、其の日記帳より元帳へ、轉記する例式を擧げます。元帳は、一科目毎に、區別して記入し、其の轉記が終りたらば、日記帳へ、轉記濟の線を掛けて證とします。其の例は、左の如くあります。



√(轉記濟の證)　　日　記　帳

34年		要摘	受		拂	
月	日		圓	十錢厘	圓	十錢厘
10	1	√賄　費			20	000
	〃	√敎育費(…………)			2	500
	〃	√同　上(…………)				200

被服費

31年 月	日	摘要	拂 圓	十錢厘
10	4	現金衣服仕立賃	3	000
	18	現金洋服屋拂	10	000
	27	現金シャツ一枚代	2	000
		決算高	15	000

34年 月	日	摘要	拂 圓	拂 十錢厘
10	1	現金長男某授業料	2	500
	〃	現金次男某同上		200
	9	現金何々書籍買入	2	000
	17	現金新聞代	1	000
	〃	現金敎育舍々費何ヶ月分	1	000
	27	現金雜誌代		500
		決算高	7	200

(5) (拂)　　賄　　費

34年		摘要	拂	
月	日		圓	十錢厘
10	1	現金	20	000
〃	12	現金	10	000
	20	現金	40	000
		決算高	70	000

34 年		摘　要	拂	
月	日		圓	十錢厘
10	7	現金不用簞笥壹棹賣拂代	5	0C0
		決　算　高	5	000

(3) (受) 利 子

34 年		摘 要	受	
月	日		圓	十錢厘
10	6	現金某銀行預金利子	4	000
		決 算 高	4	000

(2) （受）　　　　貸地貸家料

34 年 月	日	摘要	受 圓	十錢厘
10	4	現金某氏十月分（貸家）	15	000
	〃	現金某氏十月分（同）	10	000
	30	現金某氏十月分（貸地）	10	000
		決算高	35	000

(1) (受) 俸 給

34年		摘要	受	
月	日		圓	十錢厘
10	20	現金十月分	200	000
		決算高	200	000

元帳

明治卅四年十月

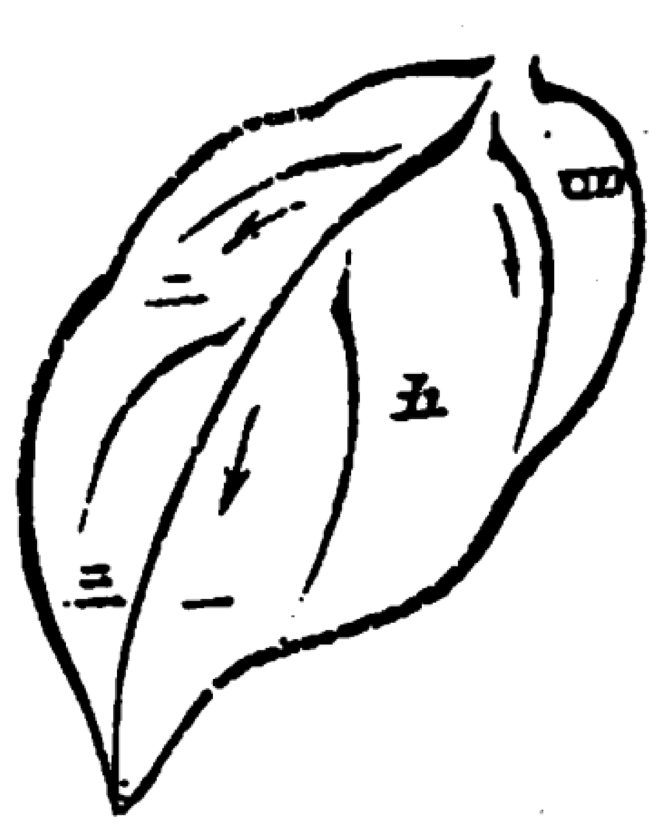
和畫通信講義（第十九回）

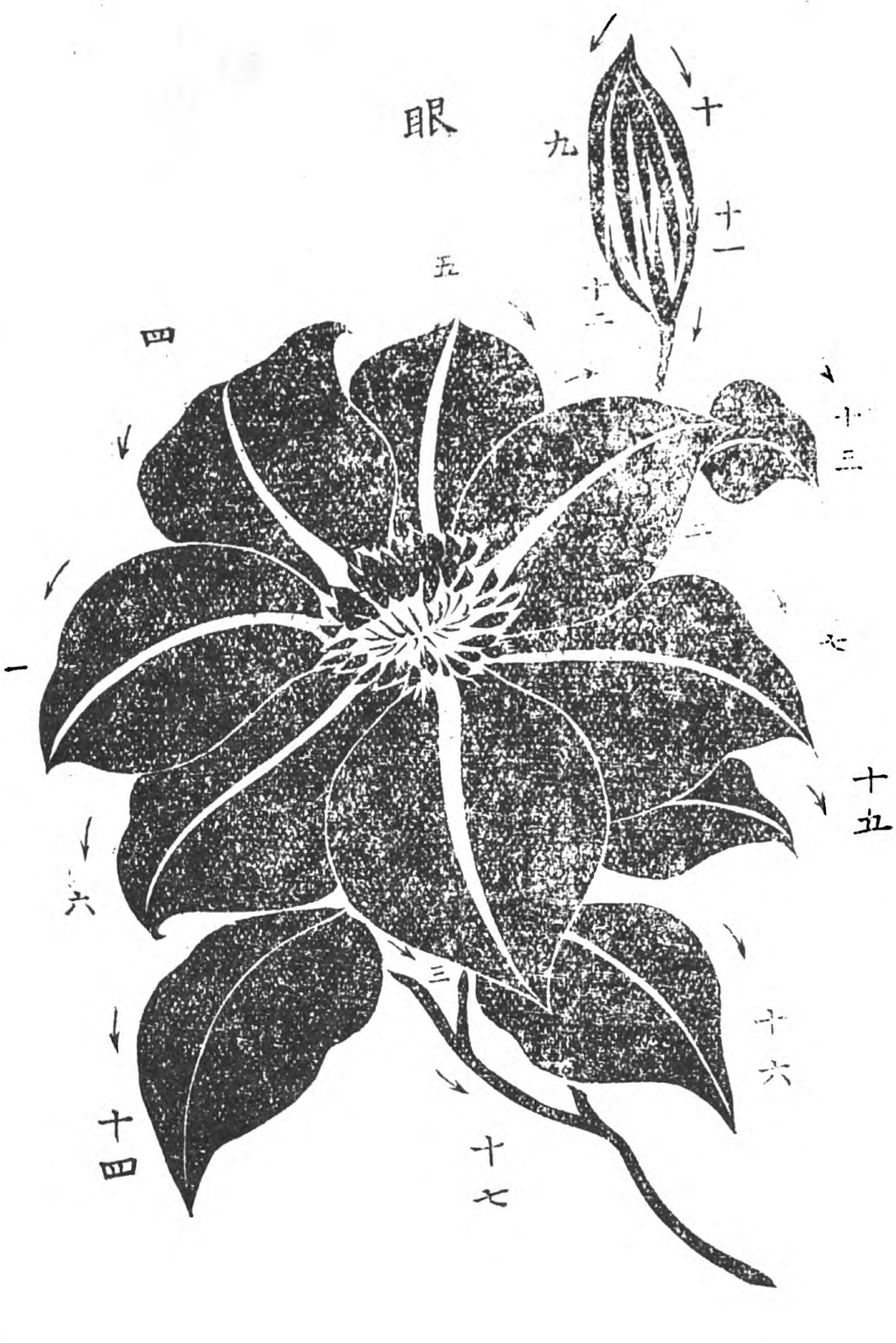
山崎彩峨

鐵線、俗に風車といふ。濃紫色の花あり。これを墨にて畫かむには、まづ、濃墨にて、花心の全體を畫き、それより、符號の順に、淡墨を含めし筆先へ、濃墨を附して、花葉をゑがき、淡墨にて、花蔕と蔓とを附し、後、濃墨にて、葉脈を入るるあり。彩色にては、藍、紅、等分より、や丶藍の多量なる紫色にて、花粉を畫き、次に、藍紅同量の紫色にて、花瓣をゑがく。されど、この紫色は、心よりは、や丶、色のうすきをよしとす。また、この瓣に用ゐたる紫色よりも、薄き紫色にて、花心をつく。蕾は、花瓣と同じ紫色にて、畫きおき、乾きて後、花粉とひとしき濃紫色にて、筆を加ふべし。葉は、通常の青色に墨少しばかりを和し、

花蔕と蔓とは、黄がちの青色にて畫く。葉脈は、墨か藍墨かにて、入る丶なり。

葉脈




眼
九
十
十一
十二
五
四
十三
一
七
十五
六
三
十六
十四
十七

文林

秋暁　　東久世通禧

きり〳〵す聲うらかれて明かたの
寒さしらるゝねやのうちかな

暁紅葉　　高崎正風

村鳥のねくらはなるゝ聲のうちに
もみちみえゆく片をかのもり

河邊菊　　鍋島直大

もみち葉のちりてなかるゝ河水に
影てそうつれきしのしらきく

初紅葉　　津輕承昭

初時雨はやくもふりしあとならん
にはひそめたる峯のもみちは

岡紅葉　　水野忠敬

片岡のかへてのもみちいろつきて
あふくこすゑのうるはしき哉

瀧邊紅葉　　宮地嚴夫

岩はしる瀧つなかれをもみちはの
にはへる枝のうへにみるかな

月前菊　　北郷久政

くれぬとて歸る山路にうれしくも
月のみせたるしらきくのはな

禁中菊　　坂正臣

塵の身も思ひあかりてたましきの
くも井の庭のきくをみるかな

暮秋月　　植松有經

淺ちはらありあけ月のかけさひて
あきのひかりはなくなりに鳧

文林

秋朝　大口鯛二

久方のそらとひとつにすむものは
あきのあしたのこゝろあり鳬

海上鴈　鍋島榮子

浪の音にこゑはまきれて和田の原
いくつらとなく鴈はきにけり

羇中山　前田朗子

旅ころもひをふる道にみるとみる
やまはすかたのかはりける哉

秋山路　西四辻茂子

秋の香の匂へるやまのまつはらの
したゆく道のおもしろきかな

菊をかさして　南郷柳子

幾秋かきくをかさしてきつれとも
なほも少女のこゝちこそすれ

山寺暮秋　柳原愛子

軒にはふ蔦のもみちはかつちりて
あきもくれゆくみねのふる寺

秋雨　小池道子

降つゝく雨はれぬまにあきのひの
くれやすくさへなりにける哉

曉月　松平健子

鳴むしのこゑかすかなる淺茅生に
しらみてのこるありあけの月

かれゆく虫のねをきゝて　松平多鶴子

草の葉におきそふ露をおもけにも
こゑかれ／＼て虫のなくなり

菊に露のおきたるを　服部磯子

うつしうゑしまかきの菊の花の上に
こほるゝはかり結ふあさつゆ

橋邊紅葉　宮地小東洋子

きて見れば木曾のかけ橋霜をへて
　蔦のもみちにあきかせぞふく

村時雨

下田春興

故里にものせさせ給へりし母君の、俄にかしこにて、身うせたまひにければ、

今さらにおもへはかなしかりそめの
　わかれそつひのわかれなりける

母君の身まからせ給ひぬると聞きて、ふるさとに歸るとて、夜もすがらひたはしりにはしりて、冷川峠を月の光にてゆとて、

さらでたに旅はかなしき秋の夜を
　つきにものおもひゆく山路かな

月さゆるかしはかたけをこえくれは
　まつ風さむくましらなくなり

家につきてよめりける

のかれえぬわかれは常の世なれとも
　なきからをたに見ぬかかなしき

母君は、かしこの野末にてけむりとならせ給ひぬるなと、人の申しけれは、

おもひわひなかむる野邊のけむりにも
　こゝろひかるゝ夕まくれかな

おもひにありて

はゝきみのたまやのともしかきたてゝ
　ものおもふ夜をこからしのふく

しゝくしろよみ路のはてにおもひわひて
　のこれるわれをしのひますらむ

あけの年、猶母のことおもひいてられて

春されはゆきも氷もとけぬるを
　いつまてきえぬなみたなるらむ

いく度おもひやみてもなきからに
　わはぬのみてそかなしかりけれ

なき母の造りおかれたる白酒とりいて
おもひきやかたみのしろきあたゝめて
　あつきめくみを猶くまむとは
月日かさありて、はや一めくりにもなりなむとする頃、十日はかりの月、いとさやけかりけれは酒、あとあたゝむ。其の折父君の、「かたわれの月を見るにもわきも子かさけあたゝめし去年をしそおもふ」とのたまはせて、余にしめさせ給ひければ、かへしにとて
かたわれの月に昔をしのふより
　みつるはおのかあみたありけり
おもはしな御空をわたる月かけも
　かけなはみつるあらひある代に

漫録

トルーアント學校（承前）

宮館さだ子譯述

（五）生徒の成績及作業

生徒の學課は、普通小學校の學課と同一なり。然れども、其の自宅に在りたる際、極めて怠慢にして、紀律なき生徒等が、同校に收容せられたる後に於きて、著しく其の面目を改め、立派なる學生に化するは、洵に愕くべき程なり。其の收容せられたる當時と、歸宅を許されたる時との狀態を比照するときは、其の學識の上に於いても、殆んど別人の趣ありて、確に、普通小學生徒を凌駕するこ

と、文部視學官の、報告に徴して瞭かなり。

午前又は、午後に於ける生徒日々の作業は、牀板、机、又はベンチ等の清掃、洗濯場、庭園、遊戯場、若しくは、仕立場に於ける諸種の作業なり。洗濯場に於いては、洗濯、臘引き、熨斗當て、及び、其の他洗濯婦に對して、必要なる助力を與へ、庭園等に於いては、野菜、其の他の耕作播種を爲し、仕立場に於いては、學校服の綻び、又は、鍵裂等の補修、幷に歸宅生徒の爲めに、古服の仕立直しを爲すなり。此の歸宅生徒の爲めに、古服の仕立直しを爲すことは、極めて必要なる事柄にして、「トルーアント」學校へ、收容せられたる時の生徒の多數は、孰れも、垢面蓬髪にして、其の衣服も不潔極まるを例とす。故に、收容及び歸宅の際には、悉く、其の衣服を脱せしめたる上、身躰の全部を洗清め、頭髪を剪り、幷に、其の衣服に對して消毒を施すの規則なるも、歸宅の際に於いて、其の衣服の、殆ど着用に耐へざるものあるより、慈善的方法に依りて、新古服の寄附を募り、此の種の生徒に給與するなり。「ミドランド」「トルーアント」學校にては、一般慈善家より、古服の寄贈を受け之を仕立直して、歸宅生徒に給與せり。

(十六)學校衛生

同校に於いては、其の收容に係る生徒の衛生に、注意すること極めて嚴密にして、各室内には、熱湯管を架設して、室内の温度を、晝夜平等ならしめ、十時間の睡眠時間を與へ、亦、寄宿舍の搆造は、特に、空氣及び光線の疏通に、意匠を凝らし毫も缺くる所なるを見ず。日々の三食は、毎週其の種類を異にし、大概、牛、羊、豚肉、ポヂング、ポレッヂ、ボイルドライス、チーズ、野菜、パン、糖蜜、スープ、コ、ア(但日曜日)及び、茶(但

日曜日）の類なり。

生徒の營養充分なることは、是迄、同校に收容せられたる生徒千五百名中にて、歸宅を許されたる際に於いて、收容の當時よりも、體量の減じたるもの、唯一名のみありしに徵しても、以て、其の一班を窺ふに足るべく、或場合に於ては、十乃至、十二磅程、體量の增加したるものあり。

同校には、別に學校醫を雇ひ置き、生徒收容の際、其の身體を撿查し、後、一定の期間を隔て丶、生徒全體の、身體を驗診するなり。

此に同校が、生徒の衞生に對して、如何に重大なる注意を拂ひつ丶あるかの、實例を擧ぐれば、二三ケ月前、バルメンガムより派遣せられたる一生徒は、收容の當時既に、窒扶斯病に罹りあるを發見せしが、病狀漸く重く、二三週間、殆ど死に瀕しつ丶ありき。同校に於いては、直に、離隔法

を行ひ、看護婦二名を付添はしめ、並に、醫師をして、一日數回診察せしむる等、萬般の注意到らざる所なく、其の費用は、嵩みて四十六磅の多きに達せり。然れども、之が爲に、同生徒は、九死の中に一生を得て、其の健康を回復することを得たり。此の如く、周到なる攝養は、到底、貧民の辨ずること能はざる所のものにして、同生徒にして、若し、其の自宅に在りたりと假定するときは、終に、病魔の斃す所となりたるや、必然なり。亦、ポッテレースより派遣せられたる一生徒も、重病に罹り、學校に於ては、治療費用二十磅以上を支出して、漸く、其の生命を救ひたり。同校の生徒衞生に留意すること、概ね此の類なり。

（七）「トルーアント」學校の成績

同校設立以來、既に、五星霜を經過しぬ。此の期間内に於ける、成績の良否如何。先づ、第一に同

校は、果して、怠惰生を敎化することを得たりしや、否や。此の問題に對しては、其の成蹟の、極めて良好なるを斷言し得べし。之を過去五年間の統計に徴するに、同校に收容せられたる生徒にして、歸宅を許されたる後、規則正しく、普通小學校に出席するものは、全數の百分の九十、乃ち、九割に該當せり。以て、其の成蹟の、極めて、良好なるを卜知するに足るべし。是れ、間接には、貧民及び、罪人の數を減じて、納稅者の負擔を輕くすると共に、怠惰生をして、僅々三四ヶ月間の嚴肅なる敎養に因りて、從來の墮習を一洗して其の生涯の經路を一變して、善良なる國民となし、幸福なる市民となりて、自他の稗益するところ、極めて多大なるを思はゞ、「トルーアント」學校の貢献するところ、豈に偉大ならずとせんや。其の將に貧民の群に入り、更に一轉して、犯罪者の群に投せんとする、怠惰生を導きて、善道に歸せしむるのみに於いても、既に、一般納稅者の負擔を輕減するに足り、結局、公費の節約を來すの利あり。之を同校々費の、一見して多額なるが如くにして、歸する所、極めて僅少なるに比すれば、もとより、同日の論にあらざるのみならず、此等の子弟が、同校の陶治に依りて、善良なる國民となり、其の一家、及び、近隣に及ぼすべき影響に對して、一考するに於いては、「トルーアント」學校の、眞價を斷定する上に於いて、蓋し、思半に過ぐるものあらむ。現に、同校長、及び、校母の机上にて、歸宅を許されたる學生の改悛に關して、其の父兄よりの感謝狀、常に堆積するを見るなるべし。（未完）

女子要書解題（阿、佐之部）

三浦千畝

蘆の下根　一巻

野中婉女の著なり。著者の略傳は、朧夜月の解題に述べたり。享保六年、婉女年六十一歳の時の作なり。巻首の文によれば、此の書、或少女の爲に、書きて與へたるものゝ如し。即ち、巻首に、『ちかき頃は、年のくはゝり給ふしるしにや、物ごとおよすげ玉ひぬれば、かうやうの事も、おはしわきまふべし。萬におとなしく見參らせ候程に、御覽じとむるふし〳〵もやと、猥に、やまともろこしの書の内、かたはし、見及び聞覺えたる事ども、書つけ侍りぬ。』とあり。さて、書名を蘆の下根と名付けたるは、巻末に、『おもひ出るまゝに、かりの玉のさかきつらね、蘆のしたねの長々しく、つゞけ侍りぬ云々』と、筆をとめしによるなり。

荒川義行女訓　一巻

著者の傳は、未だ詳ならず。巻末に、『女、此文をまもらば、夫の幸甚にして、其身も賢婦の名、のちまでものこり、人のかたみともなりなまし。文化四の年冬日、荒川義行しるす。』と見えたり。此の書、意見穩當、行文亦拙なからず。左に、嫉妬に付いての一項を擧げて、その一班を示さむ。

夫を天のごとく、敬ふ程にはあらずとも、せめて、夫を夫と思ふの眞心あらば、當時、たぐひなき女なるべし。そも〳〵女の妬は、たしなみの第一なれども、夫を夫と思ふ眞心の女は、かならず妬の心あるべし。是、夫を大切に思ふあまりより起りしことなれば、必しも、にくむべき事にあらず。（下略）

齋院記　一巻

嵯峨天皇の朝、始めて、賀茂の齋院をおく。此の書、即ち、嵯峨天皇の皇女、有智子内親王より、後鳥羽天皇の皇女、禮子内親王まで、三十四代の齋院の御名を掲げて、その小傳を註せり。（群書類從補任部に入れり。）

藏笥百首　一巻

藤井懶齋の撰する所なり。懶齋、名は臧、字は季廉、伊蒿子とも號せり。筑後の人にして、後に、京師に住し、儒を業とせり。（初め、眞鍋忠庵と稱し、醫術を以て、久留米侯に仕へり。）晩年に、京西に退居し、超然世累を絶つ。一時、隱君子の稱あり。室鳩巢の如き、本と半面の識なしと雖も、常に推尊して、伊蒿先生といふ。其の歿年を詳にせず。

此の書、古人の歌百首を撰び、歌ごとに、教訓の詞を註し、兒女の誦讀に資したるものなり。自序に、『家に一女子ありて、母さへなし。我いやしければ、うしろみその人を得ず。せめては、かかることをだに、ききてとおもふなるべし。人の見るべきにあらず。よりて、なづけて藏笥百首とするになん。』と見えたり。

佐久間象山女訓　一巻

象山、名は啓、字は子明、後、修理と稱す。信濃の人なり。豪邁不羈、濟世を以て、己の任と爲す。その慷慨憂世の傑士たりしこと、皆、人の知る所なり。元治元年、刺客に殺さる、時に年五十四。

此の書、三從四教を始め、女子の教訓、二十數條を擧げたり。文章平易にして、生硬の跡なし。その言ふ所は、重に、坐作進退、日常の心得にありて、中々に適切なるふし多し。

詠史百首（加藤千浪作）評論

海上胤平

楠正成朝臣

たちはなの花散りしより五月やみ
おほつかなくも世はなりにけり

正成存在の時より、世はおぼつかなきを、かくいひては叶はず。此の卿存在の時、治世ならばこそ。事實も考へなく、いとみだりならずや。

楠正行

なり出てむ身をはおもはす散りにけり
親の教の庭のたちはな

初句、二句とも心ゆかず。四句、教の庭とはいひがたし。庭の教とこそいふべけれ。これも、前に見えたる、花つまの萩、松のときはなどいへるたぐひにて、僻事なり。

雨にたへ嵐にたへて大宮の
御垣のさくらちらすもあらなむ

北畠顯家

あらき風ふせきかねつゝあへなくも
安部野の露と消えし君かも

かくいひては、顯家、風をふせぎかねて、露ときえたるにきこゆなり。さては、ことわりたちがたきいひざまならずや。顯家は、軍をふせぎかねたるなり。此の歌、たゞごと歌にあらず。たとへ歌にあらず。躰をなさぬとこそいふべけれ。

風さわく阿部野の露のしら玉と
砕けて消えしあたら君はも

日野資朝卿

世の人のしらぬためしに虫犬の
むくつけき世を君そいさめし

獿犬を曳かせたるは、一時の戯謔なり。詠首の歌にて、此の卿をよまむには、今少し、太けき事がらあるべきなり。そはとまれ、二句、しらぬためしといへる、こは心ゆかず。また、初句、よの人云々、四句、むくつけき世云々、一首のうへによといふことふたつありて、いとうるさし。

日野阿新丸

おのつから靡きし竹のこの道を
　盡すこゝろを神やまもりし

竹は、自らなびきたるにあらず。また、竹のこの道と、もてつけたるも、前の巴をよめる歌に、はらに小松と、いへる類にて、つたなし。一首のうへ、堀をこゆるさまなくては、詞たらはぬなり。

名和長年

にこりなき水となりつゝ君をしも
　やすきにおける船上の山

水よく舟を浮ぶると、いふ語によりて、船上山を詠るにや。そはよろしかれど、水となりつゝといふ詞いかに、かくては、長年が、をり〳〵水となりたるやうにきこえて、いぶかし。つゝといへることも叶はぬなり。この時、からくして敵を防ぎし軍なれば、安きにおけるも、ふさはしからず。

大王の船上山のふもとより
　とゝろきわたる名和の白浪

兒島高德

人しれず書くから文字の心をも
　君はうれしとおもひときけむ

二句、書きしといふべきを、文字あまれば、かく、から文字といへるなるべし。かくては、と

とのはぬあり。結句　おもひときけむといひて
は、語をなさず。

世をしのふみの丶雫の玉よろひ
　　ゆるきにさへや心おくらむ

はきよせ（三）

在近江　松竹莊主人寄贈

ある國に、母一人を養ふ浪人あり。山に入りて、鹿猿等を獵して、是をひさぎ、いとなみとせり。或る日、山に入りけるに、大きなる負傷猪いでて、其の人をかけ倒さんとかゝりけるを、何の苦もなく組留ける。其の日は、地頭の狩にて、手を爲負たる猪なれば、追々、列卒の人來りて、見とゞけ、此の趣申上げければ、領主にも、その處に至らせたまひ、其の者の猛勇を御賞美まし〱、委しく、

出生等御聞糺の上、召抱られける。此の人、劔術は勿論、諸道に達せしのみならず、母に孝心厚ければ、暫の間に、二百石まで取立たまひ、殿樣より御指圖にて、奥方に久しく召仕はれし女を、妻に下され、睦じくくらしけるが、此の母は、かたくなの惡女にて、嫁を惡むこと、仇敵の如し。然れども、此の女、まめやかに仕へける。ある日、當番の留守に、母、短刀を以て、嫁を殺さんとす。女も、奥方に仕へし者なれば、兎角あしらひ、其の場をのがれ、夫の歸りをまちて、此の事を告げければ、夫もいらへて、我も度々母を諫むといへども、聞入たまはず。今は、離緣すべしとて、親里に歸し置き、樣々殿へ申立て、暇を乞ひ、浪人して、攝津の國の片田舍に、母を伴ひ、竹細工を習ひ、なりはひとして暮しける內、母、八十に近くして、身まかりぬ。後、獨り住し、とある寺に

至り、年回の志あれば、佛前に讀經を供したしとて、住持を請待しけるに、住持いひけるは、今日は、何人の命日にて候やと、尋ねければ、母の三十三回忌なりと答ふ。おふくろは、去年往生ありしに、三十三回忌とは、如何と問ひ返しければ、昨年はてられしは、我が繼母なり。今日は、實母の命日ありといへるを聞き、住持も大に感心致し、いひけるは、今までは、實母とのみ思ひしに、さては、繼母にてありけるか、か樣申すは、如何なれども、意地あしく、人に對して愛相なき人あるを、實母たりとも、貴公の如き孝行は、出來ざるものあり。實に、世に珍らしき孝心なりと、稱歎せられしかば、一旦、親子の約をなせしかば、實母よりも、大切なり。生涯母の氣に入らんと心かけしかども、機嫌のわろかりしは、我が孝行の届かざる故なるべし、元の主家を浪人したるも、母故あり。又、後に仕へし家も、母故に暇を乞ひしあり。朝暮、この事を悔るありと、答へけるとなん。今の世までも、實の親に仕へ、孝心なる者はあれども、繼母に仕へて、かゝる孝なる者は稀なり。母身まかりし後、主人にきこえ、呼びかへされ、元の如く祿を賜はり、妻女も、貞節を守り、五ケ年經れども、他へ嫁せずしてありしを、殿樣より御聲かゝり、元の夫婦となりしとなん。實に、孝行はど、大切なるものはあらじ。如何に神佛に立身を祈りたりとも、心邪なる者は、神佛守りたまふべきや。主親に仕へ、大切にする者は、神佛は影の如くつきそひて、守りたまふこと、其の例多し。

やまとめぐり（承前）

井上頼文

頼文いはく、布留川の水源は、布留の瀧なりといへり。布留瀧は、桃尾山にありて桃尾瀧ともいふ。翠巒巍々として、飛泉三段ばかり、白虹、雲を穿て瀉ぎ、寒聲、月を誘ひて走る、廬山の銀河三千尺ともいひつべしと、湘夕の大和名所圖會に歎唱せり。おのれをさなき頃、この瀧瀬の下流を汲みて、しばし此處に住みたりしが、いとまなくて、その勝景を探ざりしこそ、のこりをしけれ。

古今集に、

仁和のみかど、親王におはしましける時、ふるの瀧、御覽ぜんとて、おはしける路に、遍昭が母の家に、やどりたまへりける時に、庭を秋の野に作りて、御物語のついでに、よみたてまつりける。

僧正遍正

里はあれて人はふりにし宿なれや庭の籬も秋の野らなる

續拾遺集に　後嵯峨院

いまは又行ても見はや石上ふるの瀧つせ跡を尋ねて

など見えたる所なり。

布留川の架たる土橋のもとに、車をとゞめ徒歩だちとなりて、つまさきあがりなる坂路を上りて、石上布留神宮を拜す。

源平盛衰記に

こゝを布留といふ事は、むかし此の川上に、一つの劔流れたり。物にふるゝごとに、石木といへども、やぶるゝにやすく、きるに難きはなし。かはばたにあやしの賤女、布を洗ふありけり。

その布にまつはれて、劔とゞまりしより、神といはひて、布留の明神と號し奉る。さてこそ布留は布に留るとぞかゝれけり。

と、あるは、布留といふ文字にすがりて、つくりまうけたる俗説あり。

又、大和名所圖會に

祭例には、かの浣布に留まりし劔とて、袋にをさめて、鳥井の外まで出し奉る。又笈渡といふ事あり。神前に護摩を修し、寶藏の笈三、負出して、僧の肩にあげて行ひあり。此時、内山永久寺、桃尾山龍福寺、産砂數村の僧侶、こゝにあつまりて勤めけるとぞ。

と、あるにても、中古より、祭式等の亂雜ありし事を察すべし。

そもそも、石上坐布留御魂神宮は、布都御魂の神劍を奉祀せり。初め神武天皇、紀伊國熊野に幸して、荒ぶる神を討ち給ふ時に、建御雷神、さきに平國し時の横刀、布都御魂を降し給ひしかば、その荒振神ども、おのづから切仆されき。天皇橿原に都し給ふに及びて、物部連の遠祖、宇麻志麻治命、その天瑞寶を獻り、神楯をたて、五十櫛を布都主劔大神に刺繞して、殿内に齋奉りき。崇神天皇の御世、八十萬の神を祭ります時、初めて、建布都大神の社を、山邊郡、石上邑に移奉り、伊香色雄命をして、天神より受傳へし瑞寶をも、共にこの社に藏めて、國家のために齋鎭め奉り、號けて、石上大神とあがめたまへる御社あり。垂仁天皇の御世には、皇子五十瓊敷命の作らしゝ、横刀一千口を神宮に納め奉り、又命に、その神寶を掌らしめ給ふ。その後、五十瓊敷命、妹、大中姫命に、その事を知らしめむとし給ふ時、吾は、手弱女なり。いかで天の神庫に得昇らむと申給ひて、

更に、物部十千根大連に治めしめ給ひ、天武天皇の二年八月庚辰、忍壁皇子を、神宮に遣して、神寶をしらべしめ給ひし事見えて、そのかみは、御神寶も、いと多かりけんを、一社の神職中に、よからぬものいできて、しのび〳〵に、京、大阪などにもちいだして、賣ひさぎたるが多かりきとぞ。いとなげかはしき事ならずや。ちかくは、天保年中にも、明治の初年にも、神寶をぬすみいだして、罰せられたる舊神職ありきと聞くも、いとかしこききはみなりかし。

屋代翁の、道の幸に、

二十九日(寛政四年十一月)石上ふるのやしろにいたる(中略)社頭にて、何くれと物せしかど、はか〴〵しき物もなし。神庫に四五尺ばかりの、白木の櫃あり、鍵なければ、開くことなしといふ。さるにても、何をこめたるにや。言傳にてもあらば、きかまほしといへば、いとふるき世の文書どもあるよし、言つき侍るとかたる。せんかたなきわざなり。

と、見えたるを思へば、既に、この櫃の内の神寶も、おほかたぬすみとりて、のこりすくなくなれる故に、拝観を許さゞりしなるべし。

大和名所圖會に、

神庫は、正殿の傍にあり。此内に、方五尺の櫃あり。神符して開く事なし、小狐といふ剣なり。

と、見えたるもこの櫃なり。里人の談に、明治の初年、この櫃をあけずの長持と號し、もし開く時は、神罰を蒙りて、両眼つぶれてめくらとなるといひけるを、ある神官、強て開き見れば、こはそもいかに、蜘の巣のみ張りわたせる空櫃なりしかば、おの〳〵顔見合せて呆然たりきとなん。

菅政友ぬしが、大宮司たりし時、社殿の後なる禁

足地を、經伺の上發掘して、布都の御魂の靈劍を得て、御靈代とあがめまつりしこと、又、鐵の楯ありて、高宮氏が考證を作られしを、栗田寛ぬしが、なほ補修せられたる事、六叉の栫につきて、太郎館季賢氏の考證、今の宮司、池田氏が建議の結果にて、神社號を神宮と改稱せられたることなど、此の御社の事につきては、いはまほしきこと多かれど、そは別に記さんとて、筆をさしおきぬ。



敎の庭

十一月廿日兼題

初冬

天　淺草區橋場町　増戸袖子

ませの内にひともとのこるしら菊の
　はなの香さむきふゆのあさかせ

評　ひともとの菊ことにかほり高し

地　大阪市東區平野町三丁目　柳田益子

にはたゝきおさるかきつの朝しもに
　ひかけさむけきふゆはきにけり

評　總向おもしろく初冬のさまよくよみいられたり

人　大阪市東區石町壹丁目八番地　中館やう子

いろも香もうつろふ野邊のもゝ草に
　しものはなさくふゆは來にけり

評　調つゞきよくとゝのひていとめでたし

甲之部

東京　篠田圓子

このゆふへうら風さむしもみち散る
いそやまこえてふゆはきにけむ

東京　吉川なか子

山てらのかねのひゝきもさえゆきて
さひしさそふるふゆはきにけり

東京　菊地かね子

うつみ火をとりかこひつゝあね妹と
かたらひかはすふゆは來にけり

大隅　山田よね子

惜めともかひあくわきはくれたけの
よかせみにしむふゆはきにけり

兵庫　中澤とし子

うつろひし垣根のきくにあさしもの
はなさくふゆとなりにけるかな

東京　椎野秀子

このはちる外山のあらしこのゆふへ
みにしみそめてふゆはきにけり

乙之部

永井さい子

むつれ來てひるにねふれるから猫の
いやにくからぬふゆは來にけり

初しくれふるほともなくもみちみし　千葉たく子
あきはきのふとなりにけるかな

きのふまてもみちかさして遊ひしな　荒野たえ子
れたくもけふはふゆとなりけり

今朝見れはそらもしくれてしら菊の　内田さた子
はなの香さむくふゆはきにけり

たつた川ちりしもみちをみつとりの　古瀬りく子
かつきてあそふふゆはきにけり

やますみのひとめまれなる庭のおもに　牛山素子
木の葉みたれてふゆはきにけり

神無つきかけひのみつもこのあさけ　高地こう子
こほりそめてそふゆは來にける

神無つきさためなくふるしくれこそ　足立こう子
ふゆのはしめのさためなりけれ

ちりのこるにはのもみちにこからしの　安藤ひさ子
吹くおとさむきふゆはきにけり

山かつかかきれの眞くすうらかれて　金井ゐき子
あたりさひしきふゆは來にけり

おつる實をひろふ冬とはなりにけり　服部萬子
すゝみになれししひのしたかけ

かれはてし池のはちす葉今朝みれは　服部正子
しもさへおきてふゆはきにけり

さきのころきくはきのふの秋なから　河合ぬひ子
はなの香さむしふゆのあさかせ

小山田にのころかゝしのかさのうへに　早川たれ子
おくしもさむきふゆはきにけり

もみち葉のちりしくにはのしら菊も　三宅中枝子

しもにいろつくふゆは來にけり

をとめらかしひの實拾ふこゝろも手に
さむけく見えてふゆは來にけり　田代きわ子

ふきすさふあらしを寒みきのふけふ
火おけこひしきふゆは來にけり　田代黯子

かりはてし小田のかゝしの笠のうへに
おくしもしろくふゆは來にけり　衣笠澄子

今朝はしも冬來にけりなしらきくの
はなにむすへるつゆもこほりて　太木光子

おきいてゝくめる朝井のうすらひに
わかやまさともふゆをしるかな　安居あや子

ふゆきぬと音つれそめてまきのはに
はけしきけさのやまあらしかな　椎野鋭子

丙之部

今日よりは何にこゝろをなくさめん
きくもわひしきふゆは來にけり　岡田春子

木からしにちりくる峰のもみち葉を
きのふのあきのかたみとも見ん　岡田美喜子

時めきしちくさのそてもきのふ今日
しをれてさむくふゆは來にけり　織田榮子

このあさけふきくる風の身にしむは
ふゆのはしめのしるしなるらん　伊勢村竹子

かくれすむみやまのおくも冬されは
あはれを見せて散るこの葉かな　伊勢村花子

むしの音も尾花もかれてきのふけふ
さひしきふゆになりにけるかな　伊勢村春子

もみぢはのちりしくころはやまでらも
あらはに見えてふゆは來にけり　植木久子

ふみまなふ窓のもみぢはちりはてゝ
ふゆ來にけらしゆきのはな咲く　金津文子

けさよりはひとめも草もかれなんと
おもふはかりに木からしのふく　青木たま子

かさゝきのわたせるはしの霜のうへに
こよひそふゆはかよひそめける　牛山竹代子

こからしの吹のまに／＼もみぢ葉の
あとなくちりてふゆは來ぬらし　福島ます子

けさははやにはの千草にしもみえて
さむきふゆにもなりにけるかな　宮田きく子

あすか川かはへのもみちちりはてゝ
ふくかせさむくふゆは來にけり　鷹山みゑ子

いりあひのかねもきこえて夕くれは
さひしさまさるふゆは來にけり　清水てふ子

にはもせにゝほひし菊はうつろひて
しもかれぬへきふゆは來にけり　小川つる子

あらし吹く峰のもみちもちりはてゝ
あはれさひしきふゆは來にけり　飯塚まつ子

やち草はかれにし野へのしらきくの
はなの香さむきふゆはきにけり　岩田よれ子

神無つき四方のけしきもしもかれて
まつのいろそふふゆは來にけり　藤波たま子

ふりはへてとふひともなきわかやとに
けさしもふゆそおとつれにける　金田とみ子

ふく風にちるやもみぢのおとたえて　國府田はる子

のき端なたゝくふゆは來にけり

ふくかせに峰のもみちはちりしきて
いへ路まとはすふゆのやまさと　加藤まさ子

あき過きてふゆ來にけらしやま賤の
かきねにおけるしもそましろき　大久保いの子

うつみ火の戀しきふゆとなりにけり
ひとのこゝろもうちしめりつゝ　村上友代子

萩はをれをはなはかれておのつから
まねかぬものをふゆはきにけり　早川のふゑ子

吹きすさふ風に木の葉のちりはてゝ
こすゑさひしきふゆはきにけり　當間みすの子

うちわたすのへのくさ葉もしもかれて
ふくかせさむみふゆは來にけり　柏木春江子

神無月そらさためなきしくれこそ
さねゆくふゆのしるしなりけれ　三宅いと子

いつしかも庭にふりけんはつしもは
ふゆのきたりししるしなりけり　村田きみ子

神無つきふく風さむく身にしみて
ころもかさぬるときとなりけり　今井りう子

朝な〳〵かせに木の葉のちりしきて
ふゆのはしめはいとゝさひしき　堀内ふさ子

山さとのあきもきのふとくれはてゝ
さひしさまさるふゆはきにけり　向山まき子

いとゝなほ人目もくさもかれはてゝ
あたりさひしくふゆは來にけり　林きみ子

神無つきかせにふかれて散るもみち
あはれさひしきふゆは來にけり　宮武てる子

神無つきよもきかかきもしもかれて
かけひのみつもこほりそめけり　河村すゑ子

いつの間にふゆはきぬらんあさ夕の
ふくかせさへも身にそしみける　關口きせ子

いつの間にふゆはきにけむ我か宿の
もみち葉さそふかせは身にしむ　濱口ころゝ子

さなきたにものあはれなる山さとに
かせも身にしむふゆはきにけり　秋岡れつ子

うもれ火にけふより馴るゝ冬のきて
にはのけしきのいとゝさひしき　太田のべ子

やま〳〵の木の葉も今は散りはてゝ
ものゝさひしきふゆは來にけり　會田まつ子

神無つきかせにもみちのちりしきて
さひしさまさるふゆとなりけり　木村とめ子

すゝみしはきのふとおもふ松かけも
しものはな咲くふゆは來にけり　正木たゑ子

賤かやのかき根のくさもしもかれて
やれまとおほふふゆは來にけり　中村とき子

やま里にひとりさひしきしはのとを
ふゆつけかほにとふしくれかな　關口きれ子

八千草のはなはかれにしにはのおもに
おくしもしろくふゆは來にけり　松山君代子

いつのまに冬はたちけんさためなき
しくれのそらとなりにけるかな　藤本みとり子

定めなきしくれはいまたふられとも
おくしもさむきふゆはきにけり　本多きさ子

ちりつもるこのはにけさは霜みねて　高石登代子

木からしさむくふゆはきにけり

つたもみち殘るあはれなぶきすきて
ふゆたつかせのおとさむけなる　北島功子

夜をさむみしくれなさそふまつかせも
ふゆのしらへとなりにけるかな　北島操子

やま姫のころものにしきはかなくも
やれてちりしくふゆは來にけり　田村種子

あき暮れて木の葉ちりしくにはの面に
あさしも見ゐてふゆはきにけり　梯竹子

冬といへはかせのおとさへ身にしみて
にはに木の葉のちりそゝきつゝ　中村いそ子

もみち葉はみなちりしれて常盤木の
みさなゝ見するふゆは來にけり　田村道子

ときめきし萩もすゝきもかれはてゝ
まれくかひなきふゆは來にけり　重中朝子

とゝめてもとまらぬ秋はくれゆきて
ふゆになりぬとしくれふるなり　植原とし子

あはれにももみち葉ちりて野も山も
つくりかへてそふゆはきにけり　木村春子

人の手にそまぬにしきのもみち葉も
はかなくちりてふゆはきにけり　木村よし子

いつしかも冬のしらへとなりにけり
木の葉なさそふまつかせのおと　桂千代子

やま姫のそめしもみちもちりはてゝ
しものはなさくふゆはきにけり　江村滿子

きのふ今日ふゆになろみのなみの音
さむくきこゑてしくれふるなり　桂たり子

きのふけふ冰にしはかりのふゆなれと
しもかれわたる野邊のあさちふ　穗積絲子

咲き殘るまかきのきくに置くしもの
いろあらそへるふゆはきにけり　田代綾子

秋はいぬかせに木の葉はちりはてゝ
あさとてさむくふゆは來にけり　後藤のぶ子

もみち散るいそ山おろしおときけは
さひしきふゆになりにけるかな　松尾せい子

散そめしならの葉こしのゆふつきも
かけうらさむきふゆそきにける　瀬戸ゑい子

さまさまの草木もいまはふゆかれて
しものはなさくときは來にけり　岩田春子

冬來ぬとしろやしらきくおきまよふ
しものおきなとなり初めにけり　熊澤しづ子

いつのまに秋はくれけんもみちはの
ちりしくにはにはつしものおく　石川元子

もみち葉はいつしかちりて庭のおもに
おくしもしろしふゆはきぬらん　川中千天津子

桐のはのかせなもまたて一葉ふた葉
ちりしくうへにしもそみねける　松村あさ子

なゝしくもに匂ひ出てたるしら菊に
おくしもふかくふゆは來にけり　松澤まつ子

冬來ぬと今朝しもしろくあさちふの
野もりかいほなたゝく木からし　増戸柳子

やまはまたきのふの秋のすかたにて
つたのもみちにしくれふるなり　山崎かめよ

ふく風もいよいよさむく身にしみて　三木ふさ子

吹く風はきのふのあきにかはられと
あらしそふゆなさそひきにける　桑原とよ子

さ夜ふけて文とりいたしひもとけは
あさ月出さむしふゆや來ぬらん　飯村あき子

月こほるふゆや來ぬらんにはのおもの
見ゐそてさむしふゆやきぬらむ　名木山勝子

小やまたにたてるそほつのそての露
おち葉のうへにしもそおきける　田尻保代子

庭はしきもみちかされのやま〳〵も
しもとおきかふるふゆはきにけり　山田いれ子

富士かれのみ雪ふきこすかぜませに
ころもなかふるふゆはきにけり　山本梓子

ちりのころこすゑのもみち色かへて
しくれふるなりむさしのゝはら　河田伊志子

冬きぬといはぬはかりにおとかへて
おくしもしろきふゆはきにけり　椎野薫子

ゆくあきをおくるとみねしうき雲の
このはをはらふのきのあさかせ　椎野清子

庭のおもなけさ起きいてゝ見わたせは
さらにしくれなさそひきにけり　小川たき子

こもりくの初瀬のてらのかれの音も
ふゆや來ぬらしゝもそおきけり　安居きやう子

神無つきしくれしくれてふくかせの
さねてきこゆるふゆはきにけり　武田[illegible]子

木のはちり秋もくれぬとやまのなの
さゆるやふゆのはしめなるらん　鐵山増代子
あらしはけしくなりまするなり

冬きぬるけしきもしろく吹くかせに
こすゑさひしくもみち散るなり　谷崎まつも

昨日けふかせにもふゆのいろみねて
にはの木の葉の散りみたれつゝ　新井やま子

人やあると妻戸おしあけ見いたせは
たゝ木からしのふきすさみつゝ　天野みち

にしきして外山かされるまゆみの木
さひしきいろにふゆそしらるゝ　德永廣子

ひとしくれふりにし今朝の庭けしき
おのつとふゆのこゝちこそすれ　小森田初子

木からしの風にしくれもそはりつゝ
火おけこひしきふゆはきにけり　坂本登子

めもあやに紅葉のにしきちりしきて
かせとゝもにやふゆのたつらむ　石川類子

もみちちる千草もかれていつしかに
なかめさひしきふゆはきにけり　石川樂子

きのふまてもみち詠めしにはのおもに
しものはなさくふゆはきにけり　石川南江子

いつしかとちるもみち葉に秋はてゝ
しもこそむすへ木からしのやま　鍋田よし子

くれなゐの落葉とともにあきつむし
ふゆたつけふのかせにまふなり　宮田けい子

八千草のうつろひのころにはのおもに
おくしもしろくふゆは來にけり　平尾あさ子

朝きよめ手にする水の身にしむは
またきにふゆのたちやそめけん　杉浦いと子

朝戸出のたもとにさむきやまかせは
片山あや子

あきないつこにおくりはてけむ　片山ふみ子

木からしに昨日さそひしもみち葉も
しもにとぢぬるふゆはきにけり　戸塚てつ子

ふく風のやまの木の葉をさそひきて
ふゆのけしきを見する今日かな　川村松子

いつしかとちるもみち葉に時雨きて
にはのけしきもふゆめきにけり　吾妻ちか子

あめの音も千くさもひともかれはてゝ
ふゆたつそらそさひしかりけり　内田とく子

ちり殘るもみちのにしきも見ねて
ふゆのすかたをそらにしるかな　福原華子

いろ／＼の花の千くさはしもかれぬ
ふゆや野邊よりたちそむるらん

十一月廿日兼題

故郷の父母に送る文

地

神田錦一ノ二〇　名木山勝子

秋深うなり行くまゝに、都大路の柳にも、身にしむ風は吹き渡り、庭の楓も、早紅葉致し候。それにつけても、まづ、御地の有樣や、嘸と、推量られ候て、聞き馴れ候ひし深山のさを鹿の聲も、籬の砧の音も、聞かぬ此の頃のよな／＼に忍ばれ申候。さて御兩親樣には、如何御暮し遊ばされ候か。今年は分けて御寒く、日頃すぐやかなる身も、はや昨日より、懷かしき母君か、手づから縫ひ賜はりし冬衣、重ね申候。叔母樣にも、はや火桶にのみ、親まれ給ひ、私事、學びやより、歸り候や否や、まづ、わたり給へと、仰せらるゝ計り、寒がらせられ候。わかき者の、申上げまつる迄も、御坐なく候へ共、これよりは、ひとしは御大切の上、御大切に御攝養遊ばすやう御願申上候。就ては、此の手袋とシャツは、誠に、見苦しき出來ばえに御坐候へ共、毛糸も、成べく宜しき物を撰び、只々、暖かにとのみ、私事、物學びのおひま／＼に、編み置き候物に御坐候へば、何とぞ、御用ゐ下され度、また、此の寫眞は、天長節の折、とり候ものにて、御地に在り候頃よりは、丈も延び、肉もつき候へど、まづ／＼、相變らず健に暮せることを、御心安う御覽じ下され度候。何子(妹)にも、益々御孝養をつとめらるゝやう、偏に祈り居り、また、某(幼き弟)にも、姉が間もなく歸るべき冬の休みには、必ず好める品々、數多土產物に進

ちらすべければ、御父上、御母君の御いひつけに違はぬやうと父上樣より然るべく御傳へ下されたく候。あなかしこ

評、幼き人々にも、ひとかたならず思ひかけらるゝ心ばせ、御兩親にも、さぞ、うれしと御覽じつらむかし。寫眞、編物、また、いかばかりか喜ばしとながめたまひけむ。すべて、まごころながらにたくまずして、よく題意にかなへるかきざまなり

人

大阪市北區中之島六丁目一　松尾せい子

神無月に入りし日より、降りみ降らずみうちしぐれ候處、かぞいろの君には、如何にすごさせ給ふらん。華子どの、二郎どのは、まめ〳〵しく、學の業にいそしみ勉め給ふらんや。妾も、幸に恙なく候まゝ、恐ながら、御心安うおぼしめしたまはり度候。さても、田面の穗なみなびくころ、鴈ならねど、雲井はるかにわたりきて、こほろぎの泣音、あはれなる曉がたのつゆのさむしろ、霧立ちのぼる夕ぐれの、さびしかりしにもまさりて、すさまじきは、冬の景色になん。野邊の千草は枯れはて、「山姫の錦の衣かけわたしたるながめさへ、吹きすさぶ木枯あはたゞしく散り候て、梢わらはになりゆくなど、人生の變遷もかくやとおもはれて、空よりも、まづ袂こそしぼられ申候、なつかしき庭の白菊は、霜をかさねて、今も匂ひ侍るらめ。ここにも、先つ頃、祖父の君より賜はりし鉢植の菊花、朝な〳〵、おきまどはせる霜にもうつろはで、有明の月に、きほひて匂ひ侍るを、こよなき友といたし居候。此の兩三日は、朝風さえわたり候を、御兩親樣には、わけて御自愛遊され候やう祈り奉り候。皆々樣へ、宜敷御つたへ下され度、願上候。

かしこ。

評、うるはしう書かれたり。もし、學の友などへのならば、天にも地にもと思はるれど、故鄕なるなつかし御兩親へのには、少しうちかたぶかるゝふしもなきにあらねば、人の位にすゑぬ。

（以下原稿到着順）

篠田圓子

龍田姫の織りなし給へる紅葉の錦も、情なき木枯の風に、大方散りはてゝ、二本三本咲き殘る籬の菊の、初霜になやめる姿、いと哀深う見ゆ侍る折から、かぞいろの君には、如何にすごし給ふらむ。頃日は、定めて室咲きの梅の御手入れにいそがはしう御在しますらむと、遙に推しまつるに付けても、いよ〳〵、冬期休暇の待ち遠しうなりまさりぬるな。かく申さば、嘸かし怠り者との御叱りもあらせらるべく、さりながら、かまへてさやうの譯には侍らず。至りてすこやかに、寸暇も惜しみて、いそしみ居れば、

恐ながら、御氣もじ易うおぼしめし給はりたくなむ。さて、當地の模樣を、聊聞え上げむに、團子坂の菊もすぎ、梅には早し、幾度花暦をくりひろげつるも、別にこゝといふ杖を曳くべき所もなく、上野淺草の公園は、いつも賑ひつれど、見なれたる目には、格別面白さも侍らず。同じ面白からぬ物の中にても、御覽に入れまほしきは改良水道にて、昨今は、もはや、大抵の家には布設せられて、水切はた雨天等の憂は、昔の夢と相成、居ながらにして玉川の清き水を用ゐ得らるゝ便利さは、中々に、片田舍の住居の遠く及ばぬところに候。
きこえあげまほしき事は、尙澤山侍れど、餘は、歸省の折の樂しみにと、書き殘し侍り。時節柄、隨分御身大切になし給ふやう、ねんじまつるにこそ。先は、久々にてみけしき御うかゞひまで。

あなかしこ

松本翠子

日増しに寒さの加はりて、暮れ行く秋の景色、いとあはれに覺え侍るを、御兩親樣には、いかに過させ給ふらん。いつこも同じと、なにがし法師のの給ひけんやうに、千町の小田に打なびく稻葉も、今はをさまりて、案山子に鴉のとまれるさまなど、古郷の野邊に、かくもよくと思ひつゝ、空ゆく月をながめ侍るに、をちかたの遠寺のかね、かすかにきこえて、御兩親樣の御膝下にて、朝な夕なに撫て愛くしみ給ひし頃さへ、悲しうきゝ侍りし事とて、一入身にしみ、心のみは、住みなれし家にかへり侍る折しも、後の山にて、鹿のなく聲しげければ、あはれ、かれは妻を戀ふるにや、われは、父母を戀ひ慕ひまつりて、かく日の暮るゝも知らで侍りしかと、いそぎ家にかへり侍りて、思ふ事のかたはしを、かくなん聞え上侍る。此の頃は、櫻谿のつた楓も、錦をかざり、父上がめで給ふ　の菊も、今を盛りと咲きみちて、金を垂れ、銀をつみ、

霜に倣りて、ひとり匂ひ侍るらん事、見まほしう思ひ侍る。ここにも、道後の圓滿寺へ、色も香もなべてならぬが多く侍れは、共に詣でんと、親しき友のの給ふからに、いぬる日曜日に、朝露しげき草葉をわけて、志さす庭をたづねしに、古郷に見ぬが多く侍れど、心からにや。いにし年、父君母君と共に、見しには及ばざりしも、中にてめづらかなるを、二株三かぶ給はせよかしと、乞ひ侍りしに、うれしくも、うけがひ侍りければ、近き程に、御送り申すべければ。又來ん秋を樂しみに、つちかひこやし給ひてよ。

あなかしこ。

桝田益子

ふきすさぶ風の音なひ、身にしみ侍るにつきても、故郷のそら戀しうながめられ侍るを、あはれ、雲井のとほつ人もそゝのかしがほなれば、道行ぶりにつたへまほしうてなん。まことや過し春、某の驛まで、見送りにいで立たせ給ひしは、昨日とこそ思ひ給ひしが、飛鳥川の流れ早く、今年も暮近くなり侍りにけれ。いで、かぞいろには、如何にか過させ給ふらん。朝の嵐、夕の露にも、心おかれ侍りて、時雨の雨の窓うつ音、夜はの霰の軒ばのひゞき、いかにあはれときゝなさせ給ふにやと、おしはかられてなん。四方の梢ならねど、こがれ侍りつれど、木がらしの風もかひなければ、雲のうはがき絶えさせじとは、思ひ給ふる物から、學びの庭のいとまなくて　怠り侍るを、よきにおしはからせ、宥させ給へかし。やう〱寒げさもさしそはりぬべければ、いとう御心づかせ給ひて、おぼつかなからずおはしまさん事を、ひたすらに、ねぎまつるになん。年の終りにも、[illegible]ほど侍られば、室の初花待ちゐるむころは、立歸り侍りてん。よろづまのあたりにきこえ侍らまし。

あなかしこ。

紅葉はの色にこがるゝと心あらは

ふきもつたへよ木からしの風

梯　たけ子

月日に關守なく、御別れ致し侍りしは、唯、昨日の如く思はるゝに、今は、早三ヶ月の昔ともなりて、村時雨の空、定めなき候となり侍りぬ。頃しも、父母君には、何の御障りも在らせられず、過させ給ふ由、何より目出度御事と、はるかに賀し奉るになん。降つて、私事も、いつになくすこやかにて、日々を樂しく送り居り侍れば、御心安うおぼしめしたまいてよ。御蔭をもて、何不自由なくて、旅路にある身は、見るもの、きくもの、皆珍らしからぬはなく に、名所古蹟などのゆかしさは、つばらにうつし、たへに畫きとりてんと思へど、あはれ、我筆拙くして、さるべき事は叶はずなん。されど、今月末頃には、たち歸る心算りに侍れば、なつかしき御膝下にて、くさ〴〵聞えあげんも、程遠からじと思へば、今よりいと嬉しくて、心のみは、早、故鄕の空に走る如きの心地のせられてなん。何も〳〵、萬はさし置きて、たゞ此事のみ。

かしこ。

松澤　まつ子

朝夕は、火桶にのみしたしまる、につけても、父上母樣には、如何過させ給ふならんと、其方の空のみ眺めやられ候折しも、嬉しや、隣村の、姉上樣より御文下され、取手おそしと拜見致し候ところ、御兩親樣には、ます〳〵御機嫌よく、おはしまし候趣、何よりも、悅ばしく存上候。弟、由雄も、日にまし、愛らしく成長致し候よし、走り行きて、見もしたく、いだきもしたき心は、一入まさり申候。何卒、寫眞一葉、いそぎ御送りたまはり度候。私も、いとすこやかにて、御兩親樣の厚き御情に、寄宿舍にありながらも、露ばかりも、不自由なる事とてはなく、御便りの度每に、御諭し下され候、御詞を守り、よろづひかへめに致し候へば、お友達も、皆、よく御まじらひ下され、むつまじく、日々學校へ通ひ居り候。學校の庭にも、枯れしぼみたる千草の中に、雄々しくも、菊のにほひ出で居り候へば、まづ、思ひいでらるゝは、故鄕のまがきの菊を、御袖にすがりて、ながめ候ひしに、父君の、「汝も、此の花の如く、よく露霜にたへて、色香ゆかしく咲き出でよ。」との御言葉に候。されば、何事も、師の君の御仰せを守り、やがて菊の如くにほひ出で、御兩親樣の御心を、なぐさめ奉らん日を樂みに、いよ〳〵勵み居り候まゝ、御心安うおぼしめし下され度候。時節柄、御身御いとひ下され度、くれ〴〵も御願ひ申上候。

かしこ。

田尻保代子

時雨の空はれまも候はぬを、まして、北國にちかき御住居、さて同堪へがたう思すらめ。すぎし日の御消息にて、つれの心おきてども、くさ〴〵示し給はり、今更に候はねど、厚き御思召のほど、いかでかわすれ侍らん。御さとし給へるまに〳〵、よろづにつゝしみ深く、さし出がましき事などは、夢さらいたすまじくまし こそ室に居給ふ友垣は、皆々、やさしき方々のみにて、朝な夕な、へだてなう、うちかたらひつゝくらし居候へば、御心安うおぼしめし下され度候。日にけに、添へまさる寒さにも、父君には日々の御いそしみ、いと〳〵かしこうなむ。御身よはく渡らせ給ふ母君は、一入御心付き遊され度候。また、おのれ、先月末つ方、何がし處の、紅葉見にものし侍り。峯にも、尾にも、かゞやく紅葉をながめ、ふもとの川に舟をうかべて、おのがじゞ、面白かりし事共は、何れ近き程に、拙き筆にものして、見奉るべくなむ。あなかしこ。

椎野　秀子

籬の花もうつろひて、ふりしきる時雨に、前栽の紅葉、いつしか

散りそむるなど、いとゞさびしく感ぜられ候に、父母の君、いかにすごさせ給ふらん。御秘藏の松風の釜、朝夕の御樂しみと、おしはかりたてまつり候。妾も、再び叔父君の家庭に歸りしより、學びの道のいそがはしきまゝ、御おとづれを怠り候ひしは、いといとつみふかきことに候。されど、なつかしき、父母の御膝もとを離れ、遠き東に侍る身には、日夜、故鄕なつかしく、父君やいかに、母君には、例のいたつきに、おかされたまはすやなど、雨につけ、風につけ、いとゞ心おかれ申候。まして、春のあしたの花、秋の夕の月を見るも、いかで、ふるさとの月花にまさるべき。こぞの此の頃は、なつかしき父君のもとにありて、秋の山路に紅葉狩し、夕の月のあかき夜に、ありし昔の物語をきゝて、一夜をあかし侍りつる事の、今、まのあたりにある心地のせらるゝも、とり〳〵ゆかしうなん。さあれ、遠き都の空に、もの學びせらるゝは、父母君の、ふかきめぐみに侍れば、いかで、身をすこやかにして、業を終へ、そのひとかどをも學び來らむといそしみ居り候へば、少しも、此の事をば御心にかけたまはで、たゞ、折〳〵の御たよりのみ、待ち侍るになん。あなかしこ。

中村いそ子

松風に吹きおろす、木の葉の音をきくにつけ、おひ〳〵、夜寒の空にむかひゆき候事とて、其の後は、御兩親樣には、御持病の御障りもなくおはしまし候、私事は幸すこやかにて、日々通學致し居り候。ことに、世の寄宿舍とはことなり候て、師の君は、たらちれの如く、私どもを御いつくしみ遊し候事、中々言の葉にはつくしがたくて、つゆ、不自由などゝ申候事は、これなく候へば、何とぞ御安心遊されたく候。何かと申居り候ても三年は、ゆめの間に過ぐる事に候へば、一日も早くわざををへ、かはらぬ、御側に參り、一しほ御心を安めまつり、みめぐみのかたはしをもむく

い申上たく、それのみ、今より心にいのりくらし居り候。何れ、この學期試驗の點數表のわかり次第、御目にかけべくと存じ候。何とぞ、伯父樣御始め、皆々樣へも、このよし御傳へ遊し、宜しく御傳言いたゞきたく、願上候。先は、御左右御うかゞひ申上候。

あなかしこ。

近藤ことし子

氷を命とたのみし暑さも、いつしか過ぎ去り、早、秋ふかく相成り、立田姫の錦織るといふなる、山の風情も、一入のながめにおはし候折りから、御二方の君には、いかに渡らせられ候や。其の後は、心ならずも、御不沙汰致し居り申候。實はをり〳〵、御容体、御伺ひ參らすべき本意に候へ共、日々の務めのいそがはしきに追はれ、つひ心にもなき、等閑に打ち過ぎ候段、平に〳〵、御ゆるし給はり度候。次に、爰元、いづれも恙なう侍れは、御心安う思召し給はり度候。

さて、昨日、京都よりの土產として、カステーラ到來致し候まゝ、不取敢、小包郵便にて、御送り申上候間、秋の夜長の御つれ〳〵に、御茶受けの料ともなし給はば、おのれの寸志も相とゞき、こよなう嬉しく存じ候。尙、時分柄、日々寒さもいやまし候へば、隨分、御老体を御大切に、御自愛遊さるべく。神かけてねぎ上參らせ候。

先づは、御身の上の程、いとおぼつかなく、あんぜられ候まゝ、拙なき水莖のあともて、かくなんものし參らせ候。あなかしこ。

福原藍子

故山の雲を、立ちはなれ侍りてよりは、はや、一年とはなり侍れど、いつも〳〵、父君母君には、御氣色御美しく、折柄の御さはりもあらせられざるこそ、芽出度うれしけれ。こゝには、御蔭樣にて、至つて健に、學びのわざを、いそしみ勵み侍れば、御心

安うこそ、此の程、やうく試験相すみ、殊に諸科好成績にて。よろこび居り侍り。いづれ此の冬には歸省いたし、山と積る御物がたりをいたさんと、日々なつかしく、折々は、鴈のつばさもがなとしたひ侍り。さては、此の毛糸の肌着、拙なき編み方ながら、四個、御防寒用にもとぞんじ、御送り申上げ候へば、御受けおさめ遊ばされ度候。なほく、日々、寒さ相増し侍れば、御注意にも御注意遊ばされん事、これのみ、神かけて祈りまいるになん。

あなかしこ。

小森田照子が朝鮮國にゆくをおくる歌ども

坂本豊子

こまくたらしらきをかけてゆく人は
　黄かれしろかれいへつとにせよ

佐々小琴子

からくにのからき海路もゆほひかに
　こゝろたひらにわたりゆくらん

佐々有鄰子

韓やまをさしてゆくふれおたやかに
　うみてふこともしらてこくらん

肥後國菊池郡城北村

佐々豊水

官幣大社臺灣神社の御鎭座祭を遙に承りて、北白川宮の第六師團長にましゝ時、めされし事のありければ、奉偲歌。

目のあたり在か如し北白川
　清きみいつの神の御姿

十月二十七日の午前四時ころより。わが里はしきりに雨降ければ。

終日降しきる雨は武かりし
　親王を偲の泪そへけり

友人の教師とならせつるに

近藤ことち子

なでしこの花より勝る教草
　つむ少女子そめてたかりける

月に對して感ずる想

金津文子

天高く氣靜かに、月は輝きて鏡の如く、空行く雁は蕭條として懐を添へ、草間に咽ぶ虫聲は吾が心胸をつく、諸行無常を告ぐる遠寺の晩鐘は山また山を越ゐ、谷に響き村に渡りては、村舍の眠をさます。書齋の机により、拱手靜座すれば、無量の感交々胸裡に湧き出で、抑へんと欲するも抑ふる能はず、仰ぎて天に咽ぶも天應ぜず、伏して地に愬ふるも地答へず、嗚呼、我れは過ぎにし年、また無き親しき友を失へり。思へば互に訣別の袂をとらへて、またのあふせを契りし彼の御馬の森かげ、美かげ山のふもと、櫻橋の袂、忘れもやらぬ、八月十五夜にてありき。嗚呼八月十五夜、今月今夜は我れ長く忘れがたき夜となりぬ。あをげば空は涙にくもりて、月はおぼろに見ゐけれど、面白き砂路をてらし小石にうつれる月かげは、光々として返謝す。あはれ悲しさに、大瀬川の河畔をたどり、彼が馬場を右手にながめて、過ぎ行けば、早や天狗松のふもとに至りぬ。あゝ天狗松々々何時までとて名殘はつきじ。思へば涙子の君が、東の都なる某女學校に入學する時にてありき。我れ送りけるに、君よ、君の心我れよく知れり。送る身よ

り、送らるゝ身程つらき我が心くみてよ、夜も早やいたく更けぬれば、君よこれにて別れん、いざ歸り玉へ、秋風寒く身にしむ此の頃、隨分氣付け玉へ、さて又玉章は必らずよ。さらば幸にあれ、いとま申さん、さらは君よと後は涙にむせびて、聞えざりき。あはれ涙子の君、母なる人と腕車をかりて馳せ去りぬ、此の時、彼れが双の眼には涙溢れて、我が方も、しかと見居ざりき。松原の方より吹き來る夜嵐は寒く、我が顏を撫で、後髮を拂ひ、虫の聲さへ、きれ／＼に聞えて、一しほわが熱涙を絞らしむ、こゝにわれしばし停みて、友なる君の後を見やりしも、なひく／＼に影は見えずなりぬ。唯車輪のひゞき、かすかに聞え、提灯の光のうす／＼と、松原の間に見ゆるのみ。此の時、我れは一聲ほり上げて、君よとよびたりしも聞えざりしならむ。折しも鳴き渡るかりがねは、我が頭上をすぎ行きて、靑き星一つ西北に方に流れおちぬ、嗚呼此時のわが感如何なりしか。かのすみれ咲く野邊に行き、花たばを作り、いさゝ川に流して、前後をあらそひし、又河畔に螢を狩り、はた又紅葉深き山に行きて、紅葉の落葉を集め、朝には互に手を取りて、學校に昇り、月には共に相會して、日課のしらべもせし事ありき。月淸らかに杏來橋をてらす夜、共に水車を唱ひつゝ歩きしは、かゝる夜にてありき。嗚呼螢を狩り、花たばを作るは能はざるなり、あはれ友は、かくまで親しきわれをおきて、如何でか、いきても無き、歸らぬ旅に逝き給しぞ。只涙湧き出でゝ肇に立ち、胸中斷裂の感あるのみ、人生れば必らず死する者とは、誰か云ひしそめしぞ。生者必滅とは、誰か定めし、之れ世の常なり。嗚呼あじきなき世や。うしや。今や靈魂何處の邊にか迷ふらん。六道の巷、何れの道をも。とめん。正に極樂淨土の蓮花の上に、安閑たる夢をや結ぶらん。花の將に咲かんとすれば無常の嵐に、散らされ、月の將に淸からんとすれば、無常の雲にかくさる。されど花は又來ん春を待ちて、美はしく咲き匂ふべし、月もまた、すみ渡る空にさやけくてらす時なからむや。されど、失せにし我がなつかしき友は、幾年を待つも又歸りて、相語らふ事を得ざるなり。かく思ひつゞけつゝ、窓を排して中庭に出で、獨り停めば孤雁月を渡り、秋の風さつ／＼として蘆荻にそよぎ、地に霜白くして、我が思ひ益々切なり。あゝなくをやめよ歎くを止めよ。多涙多血多情の人、誰か追感して、一滴の涙をこぼさゞらん。見よ、菅公は配所にありて、月を見て懷舊の情に堪へずして、去年の今夜の詩を詠じたり。また高倉帝は、南殿に出御ありて、月の光に小督を忍ばせられて、小督また、明月に君の御事思ひ出で、想夫戀を爪彈せられしにあらずや。彼の鳩巢が、月世々のかたみと云ひたるも、むべなるかな。月はくまなく照らせども、只いたづらに昔を忍ぶの種ともなりぬ。嗚呼。

照る月に昔の友の忍ばれて
袂うるほす我が涙かな

樂園

天津籠城中の鄭夫人（三）

森林生記

ボーイの胡五（とご）は、鄭夫人（ていふじん）濱子（はまこ）に向（むか）ひ、

「奥様、私が、唯今、裏門の所へ出ておりますると、道路を隔てた向ふの張家の二階窓から、愛らしき十五六の娘が、顔を出しまして、何か領事館へ投入ましたから、私、取上げて見ますると、一封の書面に、花簪が挿して厶いますが、披いて見ましても、無學の私には、何やら少しも解りません。情願、御覽を願ひます。」
と、差出したのを、濱子夫人は、手に取りて見らるゝと、何さま、一封の書に、花簪が挿してあるのは、之れを錘りとして、領事館へ投入たらしく、其の封筒には、日本領事館宛にして、唐紹儀の女子よりとありますので、良人の領事に之れを見せまするると、鄭領事は、直ちに、披見して讀下し、
「ム、、之れは、鐵道總辨の職を務むる唐紹儀の妻が、其の長女と共に、砲彈の破片に中てられて、負傷したから、露國の方へ、軍醫を頼みに遣つたが、如何なるものか、寄越して呉れない。日本は、お手不足であらうが、現に、母と姉の苦むのを見て、安閑としては居られないから、父には話さず、妾一了簡で、お頼み申し上るが、情願、妾等親子を憐と思召して、醫士を寄越して貰いたいと。
恁う云ふ意味の文面で、其の二女からの頼み書じや。」
濱子夫人「それは、マア、お氣毒で厶いますね。では、阿郎、早速、一ツ軍醫の方を、お頼みになつたら如何です。露國の方へ頼んでも、寄越して呉れないと云なら、此方で早く遣つて、日本の信切を、支那人に知らせてやりたいと思ひますから。」
鄭領事「ム、爾うじや。軍醫を頼もう。」と、
是から、直ちに青木中佐に謀り、軍醫に、高尾通譯官を差添へて、遣ることになりました。軍醫は、

通譯官と共に、其の日の午後四時頃、領事館の裏門から出で、、道路を隔てたる張翼の家に到り、斯くと通じますると、唐紹儀は、自ら出迎へ、恭しく禮を致しました。

「尊先生の枉駕を賜はりしは、我が一門の欣喜、何事か是に過ぎん。先生、一たび神術を施こし玉はゞ、荊妻の傷、立地に全治せん。」

など〻、お世辭半分、喜び半分の言語を以て、待遇ひながら、奥まりたる室の中に誘ひ行けば、彼の少女も、室の入口に出迎ひて、嫺雅に禮を爲し、日本人の厚意を謝する狀、支那婦人としては、珍らしく、活潑なる擧動であつたそうだが、軍醫は、直ちに、親子の傷所を檢めて見ると、姉娘の方は、急所の重傷であつて、迚も助かる見込はないが、母の方は、左の足、しかも、膝關節の下の所で、骨にかゝつて居るゆゑ、生命は、マア取留めることが出來るも、足を切斷しなくてはならない。そこで、軍醫は、通譯官を以て、此の事を彼等親子に告ぐると、唐紹儀は、唯、頭を垂れて默して居られたが、傍に居た、親戚の男が、進み出で〻、

「唐夫人の足を切斷と被仰が、其れは、我々親族が不服であります。苟も、唐宗家の夫人たる人を隻脚にしては、我々一族一門の耻辱だから、成るべくは切斷ずに、日本帝國神醫大人の、奇妙不思議なる施術を以て、立地に全癒するやう、三拜九拜、歎願し奉る。」

など〻云ふと、又一人の男は、

「如何に中國婦人の足、小なりと雖も、之れを切斷するは、無情なり。」

なんかんと、愚にもつかない理屈を云つて居りますから、軍醫も、困つて、本人に聞くと、唐夫人は苦しみながら、

「妾は、片足を切つて、不具になる位なら、死んだ方が勝であります。」

と、支那婦人だけに、恁う云つて居るので、軍醫は、益々困つたが、先づ諭して見ようと思ひ、通譯官をして云はしむるに、

「足を切斷するのを可厭がるのは、それは、無理はない、醫術の進歩しない此の國では、爾う云ふ治療を施したことはあるまいから、切ると云つたら、驚くであらうが、併し、決して心配することはない。近來、醫術は、頗る進歩して居るから、切斷しても、義足と云ふものを拵へて、それを着けて歩めば、眞實の足のやうで、少しも、見苦しいことはないのである。日本では、前年、外務大臣まで務めた、伯爵大隈重信と云ふ、國家柱石の人でさへ、暴徒のため、片足を傷けられたので、切斷して、義足を用ゐて居らる丶。又、廿七八年の役、牛莊の戰爭に、矢張、片足を銃丸のために打たれた、佐藤鬼將軍も、亦、切斷して、義足を用ゐられ、今は、宮中顧問官に任ぜられて居て、月に一度位づ丶、參內なし、天顏を拜し奉るのであるが、其の時は、必ず、皇后陛下より、賜はりたる義足を着けて、參內せらる丶のである。恁云ふ國家有數のお人達ですら、切斷するのであるから、貴家一族一門の耻所か、却て、名譽な位だ。」

と、種々說諭させますると、之れを聞て居た彼の少女は、耻かしそうに進み出で丶、高尾通譯官に向ひ、

「それでは、日本で名高いお人様方でも、足に傷を負ふて切らないと、毒が蔓延すると思召したときは、切つて、義足とやらをお用ゐになるので厶いますか。」

と云つゝ、更らに母に向ひ、
「母上、お聞遊ばしましたか、今の日本のお方樣の、お情け深きお言葉を、同じ人でありながら露國の人は、無慈悲無情、夫に引かへ、日本のお人は、眞心籠めてのお諭し、斯くまで事の理を解いて、仰せ聞けて賜はるもの、何にとて、是に反けませう。兎にも角にも、お語に從つて、治療を受けましたなら、必ず、惡い樣にはなさりますまい。母上、御決心遊ばしませ。父上、お勸め賜はるやう。」
と、母御を思ふ子心の、誠あらはす涙の雨。
却說、高尾通譯官が、眞心を籠めての說諭に、唐紹儀は固より、開化的の人、其の二女までが、母を勸めて、遂に、切斷して貰ふことに決心させました。そこで、軍醫は、又、高尾氏をして云はしむるに、

「切斷するには、種々の器械をも要するから、砲彈の來ないやうなる時を見て、日本領事館へ、お連れなさい。日本軍醫の腕の、及ぶだけの施術はして上げる。今では、醫術が進んで、眼さへ入眼をして、義眼と稱し、上手にすれば、入眼と云ふことが、分らない位ゐであるから、義足を拵へさして用ゐれば、少しも見苦しいことはない。」
と、最も信切に云ひ聞かすると、室の隅の方に居た、四十ばかりの支那人が、ノツ〳〵這出して、
「それでは、私しは片眼だから、唐夫人の療治序に、義眼を一ッ入れて頂きたい。」
と云つたそうだが、今に始めぬ支那人の暢氣さ加減には、イヤハヤ、驚き入り奉つたもので、……何にも斯んな所で、奉るにも及ばないが、……一同、之れがために、大笑となつて、其の日暮方、

唐夫人を擔架に載せて、日本領事館へ、連來つたのである。之から濱子夫人は、自ら、彼を看護して、日本婦人の、信切慈悲心に富むことを、外國婦人の間に知らしめたのである。

やれ籬(二)

唐扇

翌日、友達の家へ行くと、閾を入るより早く、御父さんに逢つたではないかと、家の人に聞かれた。私は點頭いた。どんな人であつたかと聞く。鼻の高い人であつたと答へた。私には、只、鼻の高い處ばかりが、頭に浸んだのである。人は笑つた。又、何をお貰ひかと聞く。お菓子を頂きましたと答へたが、人々は、眼を見合せて、あゝ可憐な兒だと細言いた。

それからは、御父さんがあるものと確めた。あるから、何故他の御父さんの樣に、家に居て下さらぬものかと、怪しんだ。これには、何か仔細のあるものと思つた。さう思つては、其の譯を聞いて見度くて堪らぬ。けれども、御父さんは、何故家に居られぬか、唯一言、自分の兄さんなり、御母さんなりに聞く事が、妙に厭はれて、到々聞かずに過した。何故きく事の厭はれたかは、余ながら解らぬが、これは、何時も御父さんの事をいふと、御母さんは、喜んだ顔をされず、滿足する答を與へられなかつた爲めであらう。

段々物心が付くに從つて、漸く家に居られぬ理由を確めた。御父さんは、離緣されたのであつた。それは、私のまだ胎内に居る時分で、實家は、長橋といふのであるが、何故離緣されたものかは、未だ知る事が出來なかつた。

或時、御母さんが、兄さんと談話の序に、祖父さんは、一つ家に居て、暮しを別にして、居られた樣なものである。これで、世渡りの道を立て丶見ろとて、私等には、少し計りの資本を下さつて、ご自分は、二人で奥の六疊の間へ隱れて、食事も、好いた物を自分で買つて喰べられた。それな調子であるから、御父さんは、常時不平で居たのだと、仰せられた事があつた。それで、御父さんの離緣されたのは、或は、一家不和のためではないかと思つて居た。

實に其の通り、御父さんの離緣されたのは、まづ、一家不和の爲めのさうである。一家の不和は、何に原因したものであるか、それは、祖父さんには、子といふものが無かつたからである。子を持つてみないと、子の可愛さ加減が分らぬから、兎角、無理な事もいふ、他々しくもなり易い、殊に、祖父さんといふのは、無慈悲な御方であつたさうだ。隣家の親爺がいふた事がある。御父さんと二人で、冬、山から木をひいた事があつたが、一日働いて、腹を空らして歸つて來るに、家は、まだ〳〵晩飯が出來ない。祖父さんだけは、爐端で獨酌をやつて居る。御父さんは、大の酒好きだ。飲み度くて〳〵、側で喉を搔いて視て居るけれども、一盃飲めとは愚か、勞れたらうとも、一言いはれなかつたものであると。

そんな舅姑であるから、御母さんは、非常に苦勞されたものと見える。實家へ歸つて、家内の樣子をきかれても、家の事は、決して他へいふなと、祖父さんにいはれて居るから言はぬとて、唯の一度、話された事がないけれども、子を持つたら、決して子のない家へは遣るな、弟は、何卒子のなる家へ遣つて下さいとは、御母さんの常々いはれ

て居た、言葉もさうである。離縁されたとはいへ、御父さんとは、親子の間ではないが、音信位はあつても、可さゝうなものだが、一度の音信もないのみか、何地に何業して居らるゝかさへ、知らぬのである。他々しいも餘りな話で、殊に、御父さんの實家の長橋といふは、私の家からは、左程遠くもないが、生れて一度も行つた事がない。幼い時分遊び浮かれて、其の家の邊まで行つても、家の人に言葉をかけられると、逃げて歸つたものゝさうである。これも、大分不思議な事で、否、少とも不思議な事はない。御父さんとは、悉皆親子の縁を斷ち、長橋とは、全く親類の關係を斷つたからで。今では赤の他心、御父さんなどゝ思ふのは、寧ろ既に、間違つて居るであらうと思つて居た。

十五歳の春、小學を卒業して、その夏、中學校へ這入つた。十六歳の時に、兄さんは二十五歳である。其の年に、嫂さんを迎へた。翌年男の兒が産れたが、間もなく死んだけれども、一人増えた家の中は、前と異つて、賑しう暮したが、其の賑ひは、軈てまた、寂しうかへる暫しの間で。

明治二十八年八月二十六日、そも此の日は如何な日であらう。私の骨は、朽ちて土と成るとも、胸の土には、二十六日といふ文字は、深く刻まれて居るであらう。永久忘るゝ事の出來ない日である私の御母さんは、大病を煩はれてから、兎角すぐれぬお身體となられて、年に一度は、必ず病褥に就かれた。中の叔父さんは、醫者の事とて、每々手を盡されたが、常に仰せられてあつた。此の身體して生きて居られるは、不思議だと、眞に。御母さんの御樣子を見て、その念を起さぬ者はなかつたのである。二十八年の夏は、非常に暑く、そ

こゝに惡い病が流行つたが、御母さんも、十日頃から、つひ病の床に就かれた。毎年の事だから、愕きはしないが、世間には死んだ人もあるので、安い心がなく、叔父さんの許へ走つて診察を請うて、初は、只流行風邪といふ事であつたが、四日五日と立つと、息苦しいとて、左を下にされず。今度は、駄目だ〳〵と仰せられた。さう易く死なれたら、人種子が盡きて仕舞うと、叔父さんは笑はれたが、二十六日の朝、見舞はれて、正午頃また來てみるとて、お歸りなされた。其の時までの御母さんの御樣子は、格別異る處はなかつた。正午頃、餘り苦しいから起き直つて見たい、抱いてみて呉れと被仰るので、兄さんは蒲團をのけ、抱へて膝の上へ起し申すと、御顏の色が、俄に別になつたのである。姉さんは愕いて、御母さん〳〵と呼ばれたけれども、返事がない。私は、悲しさ

胸に溢れて、家を出で、走り走つて叔父さんの許を叩いた。叔父さんは、衣も更へず、私と一緒にお出でなされたが、家を這入ると、兄さんの膝の上に、土の如きお顏の御母さんを見た。其の時の私の心中、筆や言葉の及んだ事ではない。叔父さんは、鞄から藥を出して、刺されたけれども、其の効はないのである。嗚呼、遂に歸らぬ人となられて仕舞つた。病名、心臟痲痺で。御年が僅に四十四。まだ〳〵往かれる年ではないが、大野の祖母さんは、泣きながら仰せられた。十年前にかう成るべき者であつたと。さうすれば、今迄御顏を見る事が出來たのは、寧ろ幸福と諦めて、悲しむまじき事であらうか、どうして悲しまずには居られやう。けれども、親を亡くした者でない上は、共に泣かぬ。共に悲しまぬ。親を亡くした者でなければ、其の心中を知らぬからである。私と共に

泣くべき者、悲しむべき者は、世間に果して幾人あらうか。あゝ、思へば怨めしい世の中である。

噴笑百話

與太生

(五)行動よりは其の心

ながれゆく一筋川のみなもとは
ドブ水もあり飲料水もあり

お揃の行衣を着て、皆、一様に、手には金剛杖を携へ、口には六根清淨を唱へて行く、彼の富士道者が、もし同じ心を持つて居るなら、それこそ大變、この御話はおやめですが、なか〳〵、左樣はまゐりますまい。たゞ、大勢一所に行くのが樂だといふ樣なものもあらうし、たゞ、道中が爲て見たいばかりに出掛けたのもあらうし、中には、職業よりは樂だからといふ懶惰者もあらう。

卑近い御話が、泥棒と巡査とです。泥棒が南の道を一散に逃げて行けば、巡査も、その同じ道を一散に追駈けて行く。南の道を一散に行くといふことには、少しの相違もないが、逃げる追駈ける、其の心は、大變な相違ぢや御座りせぬが。

大賢愚に近しとか、大奸は忠に似たりとか、容姿や風采で、人の善惡は解るものでは御座いませぬ。藥に用ゐらるゝもの、實は、大方毒性を有ッてるし、親の前にありては柔順温和の子が、國家事あるにあたりて、身をすてゝ健闘するところの勇士であるのだ。一寸思へば、世の中のことは、何が何やら、どうしてよいのやら、解り難いやうたが、また、さうばかりでもないものである。つまり、他を觀るには、外見よりも性質、容采の如何よりも、内心の正否に能く注意し、我が身を處す

るには、誠實を失はぬ樣につとむるのである。そんなに、わかりにくいものでもない樣で御座いますよ。

雜報

紫雲靉靆

●高齢者へ恩賜　大元帥陛下が奥羽の、大演習地へ行幸あらせられたる節、御召列車の、白石町停車場へ御着相成るや、陛下は、奉迎送の町民が堵の如き中に、高齢白髪の一群が、プラットホームの外に立ちて、恭しく最敬禮をなし居るを御覽あらせられ、玉座に侍りし德大寺侍從長に、何か御諚あり。侍從長は、早速小野田宮城縣知事に命じて、高齢者の姓名を取調べさせたる上、八十歳以上の男女二十一名ある趣、奏上せしかば、陛下は、老体をも厭はず送迎せし事、甚だ奇特に思召され、夫々、御菓子料御下賜の御沙汰あり。高齢者一同、天恩に感泣せしといふ。この光榮を忝ふせし高齢者は、宮城縣刈田郡白石町大字白石五百八十九番地、平民農千田梅吉父千田忠右衛門（八十二歳）外二十名なりとぞ。

●兵卒に御下問あらせらる　大元帥陛下、去九日朝九時、南軍防御線の左翼、宇臺町の南端に錦旗を駐めさせ給ひ、夫より友鶴に召し、戰況を天覽あり。遙に高清水の北なる丘阜を、北軍斥候の動作せるを御覽じ給ひ、戰況未だ進まざりしかば、陛下は、侍從武官長を顧みさせ、御座所に近き、此の地を防禦せる隊長は誰かと宣はせ、且、旨あればとて召させ給へり。其の守備隊長村松歩

兵第三十聯隊長古谷中佐（安民）は、庄少佐（平三郎）を伴ひて、御座所に咫尺したるに、陛下には、武官長をして、大隊の配備敵狀、及び少佐の、敵狀判斷を御下問あり、後、陛下は、同大隊中より兵士二名を出せと命じ給ひ、一等卒長谷川三四郎二等卒高橋房之助、武裝のまゝ咫尺捧銃の敬禮をなし、御下問を待ちしに、武官長、旨を傳へて、先づ、入營の年次を問ひ、父母兄弟の有無、入營中の困難を厭ふ思ひ朝夕に起らざるか。父母兄弟の事を想ふ毎に、望鄕の情切ならざるか。家鄕の逸樂を思ふ毎に、退營の心動かざるか。連日の演習に疲れて、兵役の苦に泣く事もあらんか抔、事細かに御下問あり。右二名は、一々明白に奉答する樣、男子として兵役に就く能はざるは、恥辱の極なり。幸に、健全の身体を父母に受け、入營を得たること、光榮之に過ぎず。區々の身を以て、國家有事の日、上　皇室の御爲忠勇を盡し得ば、男子の面目此の上なし、入營の事爭でか厭ふべき。父母は、我の兵役に就きしを光榮とし、兄弟は、我の碌々として家に歸らんよりは、軍人として、萬一の功を建てんことを祈れり。父母兄弟の心を忖度するに就けても、演習の艱難など夢厭はず。益困苦艱難と戰ひ、萬一の奉公を期すと。言語爽かに、音吐高く天顏に咫尺して、畏縮の体なく、言葉、卑野に渉りて敬禮を失ふことなく、滿腔の赤誠を披瀝したりと聞く。夫より武官長は、背囊を解かしめて、其の中を閲し、食器を開きて、半熟の飯、鹽鮭の菜を叡覽に供し、斯る粗食を爲し、連日の演習心に平かならざるべしと問ひしに、一命を捧げし軍人として、艱苦に堪へぬ樣にては、實戰に堪へず。我等は、此の給養にても、身に餘りありと奉答せしに、陛下は、殊に御滿足に覺し

たりと承る。

迪宮殿下の御近況

皇孫迪宮殿下には本年四月廿九日、御誕生あらせられしより、春去り夏過ぎ、秋逝きて、はや六月と六日の日數を經させ給ひ、其の間御虫氣だもなく、いとも御壯健に御成長遊ざれ、御兩親殿下の、御喜び申上奉るまでもなく、御兩祖陛下の御寵愛も、一方ならず在せらるゝと承はるにつけても、吾等一般臣民の歡喜、此上やあるべき。御目出度さの餘り、御近狀の一つ二つ洩れ、承はるがまゝに、左に記し奉りて、讀者と共に、喜の微意を頒つことゝなしぬ。

●御養育の御方針●●●●● 御誕生あらせられしより、暫くの間は、東宮御所に在らせられしが、御養育の御方針に就きては、宮中に於いても、一方ならず御評議を凝らされし末、お上の思召に依り、從來、宮中に於いて育てまゐらせし方々の、兎角御病氣勝なりし例も少なからねば、今は方針を變へて、寧ろ、臣民の手に御育て申上ぐるこそ宜けれと、いふに決し、遂に、川村伯爵家へ御預けと相成、宮中にては、一切干渉すべからずとの御沙汰ありしかば、川村伯は、大命の畏さに感泣し、謹で大命を拜承し、伯の主任によりて、御育て申上ぐる事となりたりとぞ

●大磯へ御引移の事●●●●● かゝりければ、殿下には、本年七月六日、川村家に御引移あり。伯爵夫妻は、鞠躬盡力、殆ど寢食を忘れて、御守立て申上げ、折しも盛夏の事とて、山の靈氣に觸れさせ給ふ方、宜しかるべしと、侍醫の注意に、八月八日より、日光御用邸に御伴ひ申上げしに、湖山の風氣御身

に適せしと見え、御體量も日に御增に相成り、其の中暑さも去りたれば、九月三日といふに、御歸京相成りたり。爾來十月中旬迄は、日々十五匁、乃至三十匁づゝ、御體量を增されしに、中旬以來、氣候の加減にや、暫く御增量なかりしかば、追々寒氣に向ふことゝて、此の度は、海濱の御靜養こそ然るべしとて、大磯なる鍋島侯爵邸を、暫し假りの御旅館に宛て、之に引移らせられたるは、十月廿三日の事なりといふ。

●・・・・・・・

●大磯御旅邸の御摸樣　此の大磯なる鍋島家の別莊としいへば、東小磯と稱へて、蒼波一碧の海濱に面せる、小高き丘上に在り。背は、伊藤侯の滄浪閣、前には、前の大隈伯別莊（今は古河市兵衛氏所有）あり。堅牢なる和風平家建の建築にて、衡門の傍に、巡査の交番所あり。門內は細砂遠く庭園を繞り、泉石水樹の布置、頗る其の宜を得て、假御殿にしては、差支へなき作なり。御旅邸には、御養育主任川村純義伯、同夫人春子、同令孃花子、主任侍醫加藤照麿、（加藤弘之氏息）同侍醫局勤務木內叔三郎、同小原賴之、乳人小林シゲ（二十五年）同刈邊タマ、（二十六年）看護婦西野ノブ、（二十五年）同西方テツ（二十六年）の諸人、絕えず御附添ひ奉りて、御守立て申上げ居れりとぞ。

●・・・・

●御養育の事　申上ぐるも恐多けれども、御發育の御姿を漏承るに、御容貌は、御圓顏にて在らせられ、御頰の邊り、ふく／＼と肥えさせ給ひ、御目附は、御父君殿下の御おもかげを受させ給ひ、御口元は、御母君殿下に肖似させ給ひ、其の御愛らしさ、申上げん言葉を知らず。昨今は、頻にオツコシ／＼など語らせ給ひ、伯夫妻お附の者を見給ふて、笑ませ給ふ御姿の、難有さは申すも更なり。頃日は、音までも聞分け給ひ、侍醫をして、

其の御悧發に驚かしめらるゝと承る。

●御生歯の事　御生誕後、最早百八十日を經過あらせられしことゝて、去月末より、御生歯の御齢とあらせられしにぞ、侍醫の面々は、一方ならず苦心し奉りしに、御目出度くも、去月二十九日に至りて、少しく根出で、翌日は、微かに手に觸るゝに至り、翌々日は、愈よ著しく、遂に去一日には、御下歯二枚、明に御生出相成りたる由。すべて生歯の頃は、一般の小兒に取りて、最も注意すべき時にして、腦膜炎等の病症を發する、正に此の頃の事なる上に、父君殿下には、曾て此の御惱あらせられたりとの事なれば、侍醫の人々は、早くより、如何やと御案じ申上げ、竊に苦心する所ありたるに、殿下には、右の如く、何等の御異狀もなき御様子を見上げ奉り、一同安堵し奉りたりと聞きぬ。

●御日常の御事　日常の御様子を承るに、朝は、六時頃お目覺に相成れば、先づ、前記二名の看護婦、御側に伺候して、御寢衣を、御常服に御着替へ申上げ、御乳人を召して、御乳を差上げ、夫より海邊をおんぶ、又は、御守車にて御連れ申上げ、一巡了りて御歸邸の後は、又御乳を召し、夫より、お庭又はお座敷にて、翫弄物を御持せ申上げなどしてお傅し、夜は、七時にお寢みとなり、十二時頃、一度御目覺になりて、御乳を召し給ふ御ならひなりと承はる。又、日常の御居間に宛てさせ給ふ處は、十二疊二間にて、其の周邊には、種々の御翫弄など飾り付け、伯爵夫人、令孃、看護婦の三名は、常にお側を去らず、夜も詰めて、お離れ申上げず、看護し奉れりといふ。

●御召物の事　殿下の御召物は、白羽二重の御筒袖にて、其の下に、毛の莫大小シャツと、白木

綿羽二重襟附の襦袢を重ね給ひ、成るべく御薄着をして、風召さぬ樣用心申上げ、寒き時は、チヤンチヤンの半袖を纏はせ給ふ。半袖に二領あり。一は緋縮緬にて、御背中に菊の御紋を、金にて刺繍りしたるもの、一は、近頃皇后陛下より御贈呈相成りたる、雪中の竹の友禪もの、後者は、最もお氣に召す由。御寢衣は、矢張、白羽二重に木綿の襦袢にて、御夜具も、同じく、白羽二重無地のものなりとぞ。

お頭は、御生後、未だ一回も御剃刀を當まゐらせず。近頃、少く長きお髮を刈りて、殆ど五分位になし奉り、御頭巾として、毛糸の編物、又は、絹糸編のものを用ひさせ給ふと承りぬ。

●●●

●御乳の事　御乳は、二人の乳人をして、交々上げしむる事になりあれば、濫に上げるは宜しからずとて、一日六回、三時間毎に上げる定めにて、先づ、一回に一合、乃至一合二勺位を、八分、又は、十分間に吸はせ給ふことゝなり居れり。人乳を、一回に一合、乃至、一合二勺といふことに就て、奇異の思を爲すものあるべけれど、右は、お乳を召す前に、御體量を計り置き、召して後、再び計り奉りて、此の分量を知るものありとぞ。

御食物は、御乳の外、總べて、差上げざることゝなり居れり。今後とても、充分御齒の揃ふまで、他のものは差上げざる由。尤も牛乳を上げる必要ある時の用心とて、平生より、吸口のみは御弄びとして、御口に宛がひ申上げ居れりといふ。

●●●

●御乳人の事　全體お乳の事は、初より、全く牛乳を用ひず、人乳を以て、御育て申上げんとの方針にて、夫れが爲め、乳人も精撰し、又乳人には、毎日好める卵子、ソツプ、牛肉、鰻飯等、結構の物を食さしめ、絶えず運動せしめあれば、乳は張

切るばかりに溢れ出でけるより、頃日に至り、今回大磯の漁夫の子に、運強くも、皇孫殿下と同じ四月二十九日に、出生せし男子あるを幸ひ、其の者に、餘れる乳を與ふる事となり居れりと。草深き賤が伏家の、拜み奉ることだに叶はざる身にてありながら、畏多くも、殿下の召させ給ふ御乳のあまりを、戴くことゝなりたる果報者は、名を土屋一郎と呼び、御乳人の一人たる小林シゲは、淺草商人の妻にして、御生誕直に召し上げられ、又、刈邊タマは、多摩川在の生れにて、先月より上りたるものなり。兩人共に、健康なる男の子あるを、夫々里にやりて、御乳人に上りしものゝ由。

●御翫弄物の事●●●●●

御翫弄物は、前田家より献上したる、張拔きの達磨大小に、お目が止り、又、近頃、御奥より立派なるデン〳〵太鼓を贈らせ給ひ、又、御母君殿下より、籠の中に、鷄、雀踊りなどの御贈り物あり。其の他ゴム人形、おしやぶりの類、處狹きまでに飾り奉る。玩弄品は、先頃、玉寶堂の製し奉れる、おしやぶり最も御意に叶ひて、御手を放し給ひしこと稀なりと承りぬ。

●最近の御體量●●●●●

殿下は、大磯へ御引移ありてより、一入御壯健に渡らせられ、今や、御體量、正に一貫七百五十五匁とならせ給へり。行啓後、俄に四十目の御增加ありと承れば、海濱の空氣、いとも御身に適して、其の効著しかりしを知るべし。かく御すこやかなる御ありさまなりと承るも、國の榮え、いとも〳〵、喜ばしきことになむ。

●天長節御祭典●●●●●

茲に、天長節御祭典御摸樣を記し奉らんに、百司は、早旦より、賢所、皇靈殿、神殿等の御粧飾を奉仕し、九時と云ふに、掌典長、各掌典、及、各式部官等定めの席に着き、伶人の奏樂中に、賢所、皇靈殿、神殿、御開扉、岩倉掌

典長、恭しく祝詞を奉讀す、日根野侍從は、天皇陛下の御代拜を奉仕し、諸員起立の間に御玉串を捧げ、吉田權掌侍は、皇后陛下の御代拜を、鍋島東宮侍從は、皇太子殿下の御代拜を、小池東宮女官は、皇太子妃殿下の御代拜を奉仕し、何れも御玉串を捧げ、畢つて、宮内省、勅奏、掛判任官總代、拜禮終て御閉扉、此に、當日の御式を終らせられ、一同退下したり。當日、勅任官總代としては、三浦宮中顧問官、奏任官總代としては、新山主事寮技師ありしとぞ。

●●●●●●

●拜謁と豊明殿の御宴　天皇陛下には、三日午前十時卅分より、十一時迄の間に於て、獨佛兩國艦隊司令官、並に、英國公使等に謁見仰付られ、引續き、小松宮彰仁親王、伏見宮貞愛親王、閑院宮載仁親王、梨本宮守正王等、各殿下に御對顏、次いで千種の間に於て、桂首相を始め、各大臣、各樞密顧問官、徳大寺内大臣、田中宮内大臣、香川皇后宮太夫、野津、伊藤兩大將、又、鳳凰の間に於いて、川口宮内次官、三宮式部長、戸田式部次長、齋藤内事課長、長崎調度局長、渡邊内藏頭、花房帝室會計審査局長等に、拜謁仰付られ、徳大寺侍從長、三宮式部長等御先導、侍從、侍從武官等供奉、豊明殿へ出御、通御の際、宮内省奏任官、及び、西溜の間に參集せる、伯、子、男爵、並に、有位華族にも、拜謁仰付らる。陛下には、嚠喨たる君が代の奏樂中に、豊明殿正面の玉座に着御、參列の各皇族殿下を始め、内外の百官は、齊しく起立。最拜禮を表したるに、陛下には、立御。玉音朗かに、左の意味の勅語を賜はりたり。

朕ハ、本日ノ誕辰ニ際シ、朕ガ敬愛スル交際列國ノ外臣、並ニ、朕ガ政府ノ臣僚ト、此ノ宴ヲ俱ニスルヲ歡ブ。

勅語の意味は、三宮式部長、參列外臣の爲め、佛語を以て奉譯したるに、桂首相は、起て左の意味の奉答を爲せり。

本日、陛下御誕辰ノ佳節ニ際シ、此ノ御宴ニ陪シ、且ツ、優渥ナル勅語ヲ下賜セラル。臣等、感激ノ至リニ堪ヘズ、玆ニ、陛下ノ臣僚ヲ代表シ、恭シク、聖壽ノ萬歳ヲ祝シ奉ル。

右畢るや、古參公使、白耳義國特命全權公使は、起て、佛語を以て、恭しく、左の意味の奉答を言上せり。

外臣等、陛下天長ノ佳節ニ際シ、御宴ニ陪スルノ榮ヲ得、殊ニ優渥ナル勅語ヲ賜フ。眞ニ一同ノ光榮トスル處ナリ。今、本使ハ、各國公使ヲ代表シ、陛下ノ萬歳ヲ奉祝シ、併セテ、貴帝室ノ益御繁榮ヲ極メサセラレンコトヲ祈リ奉ル。

三宮式部長、再び意譯して、陛下に奏上し奉りたるに、陛下には、至極御滿足の御樣子に拜し奉れり。尙、御開宴中は、親しく種々の御物語あり。特に各國公使へは、親しく佛語を以て、有り難き御會話を賜はりたるに、各公使も、熱心、陛下の聖慮を畏こみ、互に十二分の歡樂を盡し、陛下には、十二時三十分、德大寺侍從長、岡澤侍從武官長、侍從、侍從武官等を從へさせられ、入御、一同は、午後一時頃宮中を退下したりと承りぬ。

●・・・・・

●皇后陛下の御召　天長節には、宮中豐明殿の御賜宴ありたるが、皇后陛下にも、午後二時卅分より、御在京各皇族御息所殿下を、宮中に召させられ、御祝宴を賜はりたり。當日參內相成りたるは、小松宮妃賴子、閑院宮妃智惠子、小松若宮妃周子の三殿下にて、他は、何れも御所勞等にて、拜辭あらせられたりと承はりぬ。

●・・・・・

●各殿下の奉祝　迪宮殿下は、川村伯、常宮、

周宮兩殿下は、佐々木伯、富美宮、泰宮兩殿下は、林子をして、何れも、御祝詞を言上せしめられしと、漏れ承りぬ。

●賀陽宮御祝電　京都御在住の賀陽宮邦憲王殿下には、天長節奉祝の電報を、贈らせ玉ひたりと承はる。尙、在京都なる伏見文秀女王、久我誓圓尼公、村雲日榮尼公、本願寺門主、佛光寺門主、其の他、舊女官等、何れも祝詞を奉呈したりとぞ。

●伯子男の賜宴　在京、伯、子、男、及、有位華族は、拜謁仰付られたる後、東溜りの間に於いて、酒饌を賜はりたりといふ。

●酒饌下賜　例年の吉例に依り、各省廳奏任官にも、酒饌を賜りたるに付き、何れも、主務廳に出頭し、食堂に於いて祝杯を擧げたり。又、宮內省、奏、判任官にも酒饌の御下賜ありたりとぞ。

●兩院に酒饌下賜　兩院議員にも、酒饌の御下賜ありたるを以て、兩院食堂に於いて、議長、書記官廳、在京議員等、一同參集、天皇陛下の萬歳を唱へ、祝盃を擧げたりといふ。

●山階宮妃殿下の御薨去　去月三十一日、王女御降誕後、御產褥熱に罹らせられ、晝夜御療養に怠らせ玉はざりし、山階宮菊麿王妃、範子殿下には、藥石御効無く遂に、十一日の朝御薨去あらせられぬ。皇室の御愁傷は申す迄もなく、殊に皇太子妃殿下の御爲めには、姉君に當らせらるゝこととて、豫て葉山御用邸に成らせられたる同妃殿下は、彌よ、御危篤の趣聞こし召され、十一日午前九時五十分、新橋着汽車にて、匆々御歸京、直に山階宮御本邸に趣かせられ、親しく御見舞あらせられたるが、遂に御永別と相成りたる由。妃殿下の御哀悼は、申すも畏こき御事なり。九日附を以て、左の通陞勳あらせらる。

菊麿王妃勳二等　範　子

敍勳一等授寶冠章

おそれおほくも、殿下は、明治十一年十二月四日の御誕生にして、山階宮へ御入輿ありしは、二十八年九月十四日なりき。御伉儷いと淺からず、淑德の御譽れ高く、三十二年二月十三日には、武彥王、三十三年七月五日には、芳麿王の二王子をもたせ給ひ、此の度又、安子女王御誕生ありて、御榮えのいやますを祝し奉れる甲斐もなく、御產後の御經過宜しからずして、竟にかくれさせ給ひしこと、返す〴〵も痛ましき極みなれ。

●●●●●●●●

●埼玉縣の御陵墓　北埼玉郡加須町在、樋遣川村地內にある御諸別王、即ち、景行天皇御孫の墓は、愈々之に決定し、左記の區域を以て御墓地と定め、舊跡を變じ、又は、毀損する事を差止めたりといふ。

樋遣川村大字上樋遣川小字宮の下四千三百九十六番、四反八畝三步△御室神社內四反八畝一步△同附屬地三畝十五步△同字四千六百十二番△淺間神社反別七畝步△同稻荷社五千三百二十四番△同稻荷神社六畝十九步

綾羅錦繡

●●●●●●●●

●京都藤原氏の美擧　藤原源作翁といへるは、京都の木綿商なるが、弱冠にして身を實業に委ね、遂に、巨萬の富を重ねて、昨年、九十二の高齡を以て逝けり。翁歿するに臨み、其の遺產の幾分を割いて、學事獎勵の資に充んことを遺言せしかば、嗣子忠一郎氏、其の志を繼ぎ、先頃、金三萬圓を京都大學に、同二萬圓を早稻田大學（東京專門學校）に寄附し、人才養成の元資に供せんことを申出で、兩校の承諾を得たりと云ふ。忠一郎氏はまた、源作翁遺愛の名畵珍器を、空しく家に止む可らずと爲し、其の粹百十點を拔きて、京都博物

館に献納したるを以て、同館は、過般、特に展覽會を開き。衆庶の觀覽を許したる由。

●慈善老婆へ褒賞下賜の申請　慈善家を以て有名なる、淺草公園仲店の七色唐辛屋、山口お多美(六十七)が、是まで、公私立學校養育院罹災者を始め、公共團隊等へ、金品を寄附し、賞狀を受けし事數回あるに就いて、今度、愈々淺草區長より府知事へ向け、褒賞下賜の申請をなしたる由。其の申請書は左の如し。

東京市淺草區馬道町一丁目廿三番地
唐辛業　山口多美

右者儀、平素の心掛に於て、殊勝なる事項不尠、随て、風教上、聊か裨益の廉も可有之と被存、特に、此程、本區市私立小學校へ寄附相成候行爲は、家富身榮ふるの士と雖も、容易に難成次第、然るに、些細なる業務を營む一婆が、奮て此美擧を致し候は、誠に奇特なるものと思考候條、可然褒賞方御詮議相成度、就ては、明治十七年一月、無號内達に基き、別紙調書相添、此段及稟申候也。

十一月五日

●大橋佐平氏の遺言　大橋佐平氏は、葬儀の費を節して、公私諸團體へ寄附金をなすべき旨を、遺言して死したるに依り、直ちに、大橋新太郎氏より、左の通り寄附に及びたり。

一金一千圓　越後長岡小小學校奬學資金
一金一千圓　日本橋區市立小學校奬學資金
一金二千圓　早稲田大學資本金
一金一千圓　新義眞言宗大學林基本金
一金三百圓　東京盲啞學校基本金
一金二百圓　哲學館基本金
一金一千圓　東京書籍出版組合基本金

●故是眞の遺子隆眞　去る九月中、遞信省の官吏が、東宮殿下の御慶事を祝しまゐらせんため、室内電話器一組を製造して、献納したる事なるが、其の節、同省よりの依囑により、電話機を仕組みたる卓に、蒔繪を施こせし梅澤隆眞は、丹精の功空しからず、殿下の御感を蒙ふりたりとて、同省より蒔繪料、繪料の外に、特に金五十圓を賜はり

たるに付、隆眞は、感涙湧くを覺えず、斯かる名譽を得たる事、偏へに、亡父柴田是眞の恩なりとて、此の程、淺草區今戸町なる亡父の墓に參詣し碑前に額づきて、薫陶の恩を謝し、又、生母には、紀念として、黒縮緬の羽織を新調して贈りたりとぞ。

●軍人家族救助　勤勞顯著なる軍人を、優待奬勵し、及び、戰病死軍人の遺族、幷に現役兵の家族にして、貧窮なるものを救恤する、日本尙兵義團は、去五月以來、各府縣の郡市役所に託して、右遺族、幷に貧家族を調査中なりしが、其の調査出來せしもの二百四十餘名にして、今回救恤金を贈與せりといふ。

●本居宣長翁百年祭の光景　本居宣長翁の百年祭は、去四日より三日間、勢州松坂の山室神社に執行され、本居豊穎氏も、それに臨席せられて、『翁の性行』を講述し、其の他、池邊義象氏の『歐米漫遊所感と本居先生』、今泉定介氏の『本居宣長先生』等の講演ありて、參拜者の聽聞を許し、献詠和歌二千四百餘首の披露もあり、松坂全町は、祭典中休業し、遺墨、及び織物の展覽會、擊劍、角力、能樂、舞踏を催し、山車を練り、煙花を打揚げて、近來稀なる賑ひありしといふ。

●愛國婦人會　同會は、設立以來、會員次第に增加し、本部の名簿のみにて、其の數、既に三千七百餘名に及び、各縣支部の報告は未だ到着せざるも、形勢頗る宜しくして、京都、廣島、佐賀、熊本の如きは、最も加入者多かるべき見込なりと。又、主唱者奥村五百子史女は、東京市内の勸誘を了り次第、大阪名古屋を遊說する都合なりといふ。

●中等教員講習所　帝國教育會にては、中等教

員の缺乏を補充せんが爲め、數學科、及び、地理歷史科の講習を開設せしが、更に、國語漢文科の講習を開始し、其の講習期間を長めて、二ヶ年とする由。講師は、那珂博士、桑原新村兩學士、落合直文、今井彦三郎、長尾槇太郎、熊本謙次郎、石川倉次郎、波多野眞之助の諸氏にして、講習員募集期限は、本月末日までなりといふ。

●大日本秀媛會●●●● この會は、五條信敬氏の發起に係り、某教育家の勸誘に基き、設立せられたる者なりといふ。小石川區小向水道端一丁目廿八番地にあり。かゝる現象は、誠に喜ぶべく、また、目下に於て、大に必要なりと信ず。近來女子敎育の盛なるに從ひ、地方子女の出京するもの日々に增加すれども、適當なる監督の下に、通學する者少く、よろづ不便を感ずると共に、自然放縱に流れ易く、遂には其の方針を誤るなきを保すべからず。蓋し學校の多きに比して、正しき寄宿舍少なきは、現今の缺點にして、すべての弊風もこれに原因す。本會は、この缺點を補ひ、父母に換つて熱心なる指導と、親切なる保護とを與へ、女子敎育の前途に、一の安寧を計らむことを期せりといへり。畢竟、趣意と、抱負の大なるは、慶すべきことなれども、若し、單にその形式に陷り、豫言の如く實行せられざらむには、決して、賞するに足らず。吾々は、世の所謂寄宿舍を同一ならざらむことを希望するや切也。いま左に規則書をかゝぐべし。

會則

第一條　本會は東京に遊學する婦女生を監督し勤儉の風を養ひ賢母良妻たらしむるを以て目的とす

第二條　本會は大日本秀媛會と稱し東京市小石川區小日向水道端一丁目廿八番地(第六天傍)に假事務所を置く

第三條　本會は其目的を達せんが爲に監督所を設け總て會員を

寄宿せしむ

第四條　本會の會員は何校の生徒に關せず本會旨趣を贊成する者に限る

第五條　本會は時宜により良師を聘して婦女子に有益なる講話を乞ふ事あるべし

第六條　本會は會員を最家庭的に親切なる保護と嚴正なる監督を成し其品行を時々保証人に通告す

第七條　本會の會員にして學校等へ入學せんとするも都下に保証人に立つ可き程の知已なき者には都合により父兄の依頼を俟つて本會保証の任に當る事あるべし

第八條　本會には常に囑托の醫師を置きて寄宿會員に病者ありたる時の用に備ふ

但し會員の藥價は普通藥價の半額を納めしむ

第九條　本會の會員は會費として食料及び舍費を月々前納すべし

但し物價の高低に因り多少の增減あるも此場合には前月中に保証人迄通告するものとす

第十條　本會に入會せんとする者は左の書式に從ひ入會申込書を差出して承諾を待つべし（書式は略す）

第十一條　本會に入會を承認せられたる者は住所の何方を問はず成るべく父兄親戚の中より保証人を撰び連署を以て在會証書を差出す可し

但し地方保証人は役場の證明書を要す

第十二條　本會へ入會手續濟みたる者へは直に會員票を與ふ

第十三條　本會より退會せんとするものは保証人連署にて其趣を申出つべし

第十四條　本會の會員にして會則に違反し其他不都合の行爲ありたる時は保証人に通告の上退會せしむる事あるべし

會員心得

一本會々員は坐作進退言語應對等總て學生に恥ぢざる樣注意すべし

一會員に總て奢侈の風を避け服裝等極めて清潔を主とし理髮及び洗濯等成るべく各自にすべし

一本會々員は外泊及び他人を寄宿せしむる事を許さず若し已むを得ざる事故ある時は其由申出監督の許可を受くべし

一本會監督所の外出門限は午前六時より午後六時迄とす時宜に依り伸縮する事あるべし

一本會々員は外出時間中と雖も妄に外出する事を得ず

一本會々員は妄に他人と應接する事を得ず監督或は補助の許可を受くべし

但し事情に依り監督者立合をなす事あるべし

一本會々員の學術練習時間は午後十時限とす

一本會々員は從學に不必要の雜品を所持する事を禁ず
一本會々員は會費(食料及び舍費として)壹ヶ月金七圓五拾錢を前納すべし
　但時宜により增減する事あるべし
一本會々員の入浴は監督所の內にてなさしむ
　但結髮及び炭油等の費用は費以外に各自辨するものとす

●裁縫科試驗問題　明治卅四年十月二十一日、(月曜)熊本縣立師範學校女子部に於いて行ひたる、小學校專科正教員裁縫科の試驗問題を得たれば、左にかゝぐ。

小學校專科正教員(裁縫科)試驗問題(四時間)(一)、小倉織の袴地を以て八九歲の男兒袴を仕立てんとするに紐下一尺四寸五分堅込一寸五分襠の高さ八寸五分にする時は用布幾尺なるか積り方及び裁方圖を記せ

(二)、九寸五分幅の縮緬を以て女物長襦袢を裁たんとするに袖丈一尺六寸五分身丈三尺五寸にせば何程の布を要するか積り方及び裁方圖を記せ

(三)、常幅の布を以て大夜着を製せんとするに袖丈一尺八寸身丈四尺九寸にするときは表並に裏の用布各幾尺となるか積り方及び裁方圖を記せ

(四)、二尺幅の布五尺五寸を以てヅボン下を製せんとするに股上八寸五分股下二尺にせば如何なる裁方にして可なるか其圖を記せ

(五)、白紙を以て並袴の腰立方糸懸の表本を製れ

(六)、十一歲位なる女兒の着けべき綿入衣の右半身を縫へ

寸法

一、袖丈五寸五分(ツツソデ)
一、裾衽六分

但實物の二分の一

○

授業法(一時間)

(一)、裁縫科教授の初步に於て注意すべき要件を記せ

(二)、高等科二學年に袷を教授すべき順序方法を記せ

以上

●米國兒童に關する研究

米國華盛頓のマックドナルド博士は、兒童心理の研究者として、名高き人なるが、此の程「兒童の研究」と題する論文を、エヴエリーボヂース、ドガジーン雜誌に掲げて、華盛頓府の就學兒童二萬人に就て、統計的研究を

爲したる結果を示せり。博士は曰く、聰明の度に於いては、男女の兒童に差なしと雖も、男兒は、女兒よりも、不活潑なるもの五分方多し。こは、女兒は男兒よりも、早熟なるためならん。又、米人の兒童は、雜種兒よりも聰明なり。これ、雜婚は、善良なる兒童を得難きことを證するならん、非勞働者(官吏商人等)の兒童は、勞働者の兒童に優れり。こは、家庭の狀況、兒童の智育發達に、有利なる爲ならん。又、非勞働者の兒童は、勞働者の兒童より神經質にして、虛弱なり。これ生計の裕なるもの、必しも、健康なる能はざることを證するものなり、多くの兒童は、時々懶惰なれども、或る兒童は、慢性的に懶惰なり。而して、慢性的なるものは、多く不活潑なり。即ち不活潑は懶惰に伴ふものなり。又、懶惰なるものは、女兒よりも男兒に多し。御し難き男兒は、女兒よりも甚だ多し。之を要するに、諸種の缺點は、男兒に多く、其の原因は種々あることならんも、男兒は、女兒よりも危險に遭遇すること多く、誘惑せらるゝ場合多きためならん。此の事は、監獄及び感化院にある、男子五人に對し、女子一人ある事實にても、證明するを得べし。然も、缺點ある女子は、其の缺點は男子より頗る猛烈なるものなり。云々と。

●渴と果物の効用　倫敦のランセット雜誌は、渴を癒するに、果物の効用あるとを論じ、果物は、滋養物と稱する能はざるも、水分に富み、他の有害なる飲食を、嗜む癖を治し得る効ありと云ひ、次で曰く、西瓜は、九割五分、葡萄は八割、密柑は八割六分、レモンは九割、桃は八割八分、林檎は八割二分、梨は八割八分、梅は八割、苺は九割の水分を含む。されば、渴を癒するに、適當なるは

勿論にして、夏期には、殊に適當なり。又、果物の利益は、飲酒の量を減せしむるに在り。尚又、其の香は、消化を助くるに足る。而して、新しき熟したる果物は、毫も黴菌を含まず。此の點に於て、新鮮の牛乳に均し。又、果物の含む酸は、ボッタースと結合して、血液の健全なるアルカリ分を、保存する効あり。云々といへり。

●馬鈴薯の滋養分　馬鈴薯の歐洲諸國に輸入せられたるは、阿米利加發見後、英國のサー、ウオーハー、ラレイが、煙草と共に、ヴァージニアより持歸りたるに始り、爾來、歐洲人の副食物として、殆ど缺くべからざるものとなれり。此の物、重に澱粉質より成ることは、何人も熟知せる所なるが、精細に之を分析するときは、百分中、水七八三。澱粉一八四〇窒素質二、二。脂肪質、〇一。鑛物質一を含み、同量の米に比すれば、四分の一の滋養分を有する割合なれども、米を飯と爲すときは、多くの水を含み、殆ど、同一の滋養分を有するものとなる。又、馬鈴薯を不消化なりと稱するは、學説上、何等の根據なきことなり。但し、馬鈴薯は、澱粉多きを以て、米と同じく、体力を養ふに適し、体の網膜を養ふに適せず。されば、肉に混へて常食となさば、頗る適當なるものなり。只、注意すべきことは、永く蓄へたる馬鈴薯にして、已に發芽するに至りたるものは、ソラニンと稱する、有毒性の物質を有するを以て食用に適せざることなりとぞ。

●樹木の不眠病　英國雜誌の報に據れば、樹木も、絶えず眠らざれば、人と同じく、終に枯死するに至る。例へば、夜間絶えず、強き光線に照さるゝ樹木の如きは、其の葉次第に凋み、枝より落つるものなり。又、市街の道路に植附けある樹木

にして、夜間電燈の光に照さるゝものは、枯るゝこと速かなりと云ふ。

●落葉籠

投稿の規定

一、字体は楷書に限る、但漢字の外は總て平假名にて、變体假名を用ゐるべからず。

二、文体は、投稿者の隨意なれども、一行廿二字詰、五行内外の事。

但、可成は、フリガナを附けて貰ひたし。

三、誌上の匿名は、差支なけれど、便宜の所へ、必らず宿所姓名を明記すべし。

四、記事は、隨觀隨目何にてもよけれど、有益にして、興味あるものを望む。

五、切期限は、目次兼題の歌文と同日の事。用紙は、半紙。尤も、ハガキにてもよし。

▲南海、みどり子、御誌へ、短篇小説を投じて宜しいですか、お伺ひ申します。

▲記者、いけぬといふ事はありませんが、姫方の目下は、小説などを作るべき時代ぢやないでせう。學科の餘技に一寸慰みして見るは、咎むる限ぢやありませんが、本を忘れて末に走つてはいけません。其の點に於て、われ〳〵は、専ら普通文を迎へます。

▲南海、みどり子、兼題歌文に高點を得らるゝ姉達の、お姿に接したう思ひますが、其の肖像を、掲げては下さいませんか。

▲南海、みどり子、兼題の歌、天地人の御評は、誠によくわかつて嬉しう存じますが、文章の方へも、評を示して下さい。

▲記者、今回から附けました。

▲大阪、ます子、私は、草木を愛して、澤山植ゑて置きますが、庭前梅樹の下の、あて杉、(茶室の柱などに用ち) 折角植ゑつけたかと思ふと枯れて、誠に困ります。何卒培養法を敎へて下さい。

▲東京、とし子、日本女學會發行の女學講義錄と、大八洲學校の講義錄とを見度く存じ候が、いづれも、いまだ發行に相成り居り候や、次號に御敎示下され度候。

▲東京、ちどり子、言文一致でいたしますと、如何致しましても、いゝましと、ますの言葉が多く出ますが、これは、出ても宜しうございますか、又は、他に、よい法がございますか。

▲米澤、はな子、出過ぎた考かは知れませんが、東京へ出て學問したいと思ひますけれども、其の資金がありません。人樣の話によると交換局や、印刷局では、女子に給料を與へるさうですが、何業でも、自分でお金をとつて、勉强する法はありますまいか。東京の姫達、あるならば、どうぞ敎へて下さいまし。

▲尾張、ちめ子曰、石見の順子さんから、夫婦間の稱呼の質問が出まして、思ひつきましたが、父母が、其の子を呼ぶには、「誰さん」と、さんをつけるが宜しうございますか。若し、よいとすれば、大人になりて後も、改める必要はありませぬか。諸媛方の御考を御きかせ下さい。

▲東京よし子曰、私などのきる衣服は、すべて、大縞、大形の、はでなものが叶ひますか。また、なみ〳〵の者がよいでせうか。諸媛方敎へて下さいませんか。

▲東京、よし子曰、また、御序ですから、御聞き申しますが、此の頃では、靴をはく御方が多くなつて來たやうでありますが、下駄をはくのと何れが勝つて居りませう。

▲京都、さと子曰、歌だの、活花、音樂などに秀でた御方でありながら、俗に、はらぐろいものがありますが、是も、美しき心の人どいへませうか。

題字と口繪につきて

こは、佐々木高行伯が、特に諸媛のために、詠歌執筆せられたるものにして、その歌の意を味ひなば、蓋し無限なると共に、善き教の手本ともなりなまし。いま左に伯の畧傳を紹介せむ。

伯は高知の藩士にして、天保元年土佐に生る。母の腹中にありしとき、父に分れて、苦しきがうち人となりぬ。つねに、朱子の學をこのみ、また和歌に長せり。慶應三年、外國交渉のことにつきて長崎にありしが、明治元年、その奉行河津伊賀守、幕府の敗れしことをきゝて、逃げ去りしかば、市内さわがしかりしかば、松方伯と共に、假に、奉行の事をなし、以つて、人の心を安めけり。それより諸司の官を經て、仝四年歐米各國に派遣せられ、ものわたりその文化を見て歸朝せり。かくて、參議、及び工部卿等の顯要の地位に歴任し、明治十七年、特旨を以て華族に列せられ、伯爵を授けらる。現今は、常宮周宮兩内親王御養育主任、兼、樞密院顧問官從二位勳一等伯爵たり。

範子殿下の御肖像

かけまくもかしこかれど、　殿下の御薨去遊されたることは、雜報欄にて、そのあらましを記しまつりしが、なほ、洩れたるふし一つ二つ物したてまつらむに、　殿下は、九條道孝公の第二女にまし〳〵、御心ばえいと賢かしくおはしまし、且御慈悲深く、常に御高徳のきこえあり。山階宮に御婚嫁あらせられてより、二柱の御子をさへ設けさせ給ひ、竹の園生の、いやさかえに〳〵むとこそおもひたまへるに、いともいともかなしきことの極なれ。されば、こたび特

に諸媛のために、宮家より、殿下の御肖像を乞ひえたれば、こゝに掲げて、諸媛と共に、普く弔意を表したてまつるになむ。

紅蘭女史の繪

女史は、幕末の詩人梁川星巌の妻にして、その夫を助けたる等の功、甚だ賞すべきもの多し。次號に於いて、三輪田眞佐子刀自が、例の健筆をもて、そが傳記を物せらるゝ筈なれば、諸媛其の時をまち給へかし。



女鑑歌文月次兼題

十二月五日分

歌　雪

文　燈下の讀書

右十一月廿四日〆切

十二月廿日

歌　埋火

文　歳暮の感

右十二月九日〆切

一月五日

歌　海邊鶴

文　新年の詞

右十二月廿四日〆切

文學博士　元良勇次郎先生評論
文學士　戸澤姑射子譯述



死は人生の問題なり**愛**は其解釋なり愛は天地を動かすれど愛は心と結びつきて初めて**靈妙秘密**の域に達すとは本篇を貫ける不[illegible]なり、原書は戀愛小説家として有名なるアプレウス氏の著を元良博士が本篇に就ての評論、姑射子が温雅なる譯筆實に近世文壇の珍なりモデール也

●洋裝全一冊船來紙刷新意匠畫伯の名畫拾葉挿入●銀文字入●●正價金參拾錢●郵税六錢●郵劵代用四拾錢

滑稽小説五圓紙幣

其脚色奇絶快絶其詞句圓轉滑脱

●正價金拾五錢●郵税四錢●本書は有名ある文學者(の名)無名子の著あり

發行所 東京神田錦町二角 **勉强堂書店**◎**賣捌所** 東京●東京堂●寶永館●上田屋●林平●岡崎屋●大阪吉岡●盛文館●名古屋川瀬

小松宮殿下御題字

佐野伯爵序文○足立寛氏著○日本赤十字社藏版

通俗 救急處置

本書は日本赤十字社篤志看護婦人會講師足立寛先生が同會に於て講演せられたるものを上梓したるものにして汎く世に保健救急の適要を知らしめんとて傍訓解釋を附せられたれば兒女と雖も容易く文意を領解し得る貴重の良書なり今その所載大要を擧ぐれば左の如し

●要旨●衛生法大意○住居○飲食○衣服○身體○運動及散歩●救急法○外傷及止血法○急發症救急法及同呼吸法○傳染病救護法及消毒法○雑病救護法○繃帯材料及救急藥用法○救急箱解説○救急小包解説

製本クロース製洋裝
●正價一冊代金貳拾五錢郵税四錢
●郵劵代用一割増

取次販賣所 東京京橋區南傳馬町一丁目七番地

日本赤十字發行所

新刊發賣廣告

福羽美靜大人序文
指原乙子女史編纂
下田義天類大人校定

女子文章軌範

全一册
和装美本
定價金參拾錢
郵税金四錢

本書は上長徳の頃より下明治の初年に至る九百年間に輩出せし名媛紫式部、清少納言、相摸、阿佛尼、鵜殿よの子、弓屋しづ子、三島さや子、荷田蒼生子、西三條實條公後室、柏原氏の母、馬場存義の母千代、梶女、千代能、その女、河内荻子等の傑作中に就き其の最も精を拔き粹を收めて消息、記事、紀行、哀傷、序跋、教訓、論文の七門に分ち毎章末に其の作法を詳解し尚難句古事地名等には一々其の句意語法出所本源を注釋して、我國文の構造及雅趣を會得するの捷徑たらしむ加之善く本書を熟讀せば又以て本邦婦人獨得の長處たる脩身齊家の一助たらん是を以て學校用書に適するは論なく家庭の諸媛も亦各一本を得て座右に備へば必ず無比の好伴侶たらん

發行所

東京市京橋區築地二丁目二十一番地

株式會社 國光社

女鑑

明治三十四年十一月廿日發行
毎月二回五日廿日發行 第貳百四拾壹號
明治廿五年三月十二日第三種郵便物認可

東京市京橋區築地貳丁目株式會社國光社印刷部印刷